

幼児の教育 第115巻 第3号 平成28年7月1日発行 ISSN0289-0836

子ども学の源流を次世代につなぐ

幼児の教育

[特集] 保育現場で気になるコトバ考
「葛藤」とは……?

[レポート] こども園をつくる

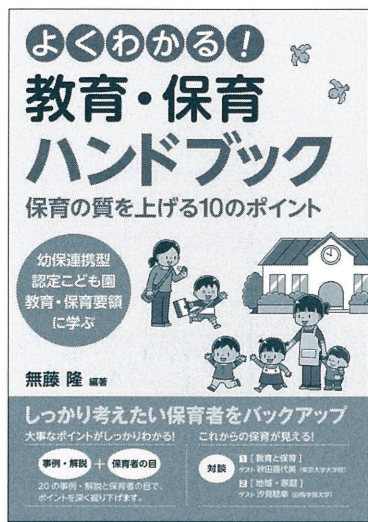
文京区立お茶の水女子大学こども園の記録
vol.1 設立までの経緯、開園までの取り組み

[子ども学探訪] 幼児の教育アーカイブズとの対話
保育の中の「自然」、「自然」の中の保育

第115巻 第3号 日本幼稚園協会

夏 2016
since 1901

イラストも豊富でよみやすい! 明日の保育を見つめなおすためのヒント満載。



ISBN978-4-577-81389-8

よくわかる! 教育・保育 ハンドブック

幼保連携型認定こども園教育・保育要領に学ぶ
保育の質を上げる10のポイント

編著:無藤 隆

定価1,728円(税込) 21×15cm 144ページ

これからの教育・保育を考える際、保育の質向上のためにおさえておきたい10のポイントを切り口として、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』を読み解きます。『教育・保育要領』のフレーベル館版解説書。

本書の特長

「10のポイント」事例と解説で、 目の前の保育が見える!

ポイント説明／事例と解説／保育者の目で理解が深まる!

★気鋭の研究者がわかりやすく、ていねいに紹介します。

執筆者 (50音順)

大豆生田啓友先生 (玉川大学)
古賀松香先生 (京都教育大学)
松寄洋子先生 (千葉大学)
矢藤誠慈郎先生 (岡崎女子大学)
和田美香先生 (聖心女子専門学校)

対談で、これからが見える!

保育者が、これから考えるべきことが見え
てくる!

★無藤隆先生を対談のホスト役とし、ゲストをお迎えして、注目のテーマについてお話をうかがいました。

ゲスト:秋田喜代美先生 (東京大学大学院 教授)
テーマ:「教育と保育」

古くて新しい、奥行きのあるテーマである「教育と保育」。園や保育者は、今後、どんな点に着目すべきなのでしょう。

ゲスト:汐見稔幸先生 (白梅学園大学 学長)
テーマ:「地域・家庭」

これからの園に求められる役割に、「地域・家庭」へのかかわりがあります。どんなことがポイントになるのでしょうか。

※執筆者の所属は、本書刊行時のものです。



しっかり持ってね
いくよ それ！

子どもの情景

写真

子どもの情景 ①

目次

葛藤できる幸せ ②

特集

保育現場で気になる「トバ考」

「葛藤」とは……？ ④

《view 視野》

葛藤する力の育ちは、心の育ちの

バロメーター 加藤繁美 ⑤

《視点》

子どもの葛藤、私の葛藤、保育の中の葛藤

川崎徳子 ⑨

保育をめぐる葛藤について 湯浅周子 ⑬

葛藤を思想史の中で考える 杉田孝夫 ⑰

《特集 memo》 ⑳

実践研究

私の保育ノート

保育と育児 依田奈津子 ㉒

おばあちゃんの孫育て日誌

それぞれが、楽しく、あれかし 瀧田節子 ㉔

保育エッセイ

四季の子ども ㉖

虫捕り 川田学 ㉘

本棚

古典の散歩道

「あかちゃんのくるひ」

—親子の「危機」に寄り添う絵本—

宮下美砂子

㉚

目次

レポート

こども園をつくる

— 文京区立お茶の水女子大学こども園の
記録 — Vol.1
設立までの経緯、開園までの取り組み

宮里曉美

40

子ども学探訪

幼児の教育アーカイブズとの対話 ⑤

保育の中の「自然」、「自然」の中の保育

白井美沙子

49

そこにいる子どもであるということ ②

「子ども好き」という言説 浜口順子

54

報告

ガボンの幼児教育

JICA(青年海外協力隊)に参加して

西垣友恵

58

子ども学のつどい

イベント・メディア情報・

読者投稿・編集後記 他

63

葛藤できる幸せ

まど

四月に、新しい子ども・子育て支援システムがスタートした。その直前、保育所入園が決まらなかつた怒りを「保育園落ちた日本死ね」というソーシャルキングな文章で綴った匿名ブログが話題となった。しかもそれに対して首相が、匿名投稿には対応できないという、ある意味典型的な反応を国会でしてくれたおかげで、一気に現在の待機児童問題が世の中に広く取り沙汰され、保育士の待遇改善の必要性について多少なりとも周知されるようになったことは、皮肉だが良い展開だったと言える。それでも政府が「保育定員の規制緩和」という姑息な質低下策しか打ち出さない(四月上旬現在)ことに対しては、心もとない限りである。

今号で「葛藤」を特集した。子どもよりも良い育ちやより良い保育環境を追求する中で葛藤を体験できるのは、本来あるべき姿なのである。規制緩和によって定員オーバーの子どもを受け入れ、子どもの命や安全をせいぜい物理的に守ることが至上課題となってしまうような保育現場では、「葛藤」する時間も許されていないと言えないか。目先の問題ばかりに追われず、社会全体で乳幼児をいかに産み育てるかのグランドデザインが必要なのに違いない。(H)

特集

保育現場で「気」になるコトバ考10

「葛藤」とは……？

子どもは安心して生活する中で、だんだんと周囲に関心が向き、いろいろなことに挑戦しながら、種々の「葛藤」を味わい、自分の内側でジレンマを体験します。

「葛藤」はまた、先生や親にとっても、保育の日々の中で避けられないものでしょう。どちらかというところ、イナスイメージのある「葛藤」ですが、ないに越したことはないのでしょうか。今回は、「葛藤」を考えます。



葛藤する力の育ちは、 心の育ちのバロメーター

加藤繁美

(大学教員)

「葛藤する幼児」という言葉を聞いて、まず頭に思い浮かんでくるのが四歳児の姿です。

ダダコネする二歳児とも、「揺れる心」の三歳児とも異なる、「葛藤する幼児」の姿が、思案しながら自己決定する四歳児の中には、確かに育っているのです。

もちろん、四歳児の中に葛藤する姿が現れるのですから、五歳児が葛藤しないわけがありません。あるいは、揺れる三歳児の心の中に、葛藤する「心の芽」が育っていないということでもありません。葛藤する幼児の心は、乳幼児期の心の育ちに対応して、一定の順序性を持ちながら、子どもの中に育っていくのです。

実際、「カズラや藤がもつれからむ」(『広辞苑』)状態を表現した「葛藤」という言葉を見るとわかるように、「葛藤」する心が存在するためには、絡まった自分の心をメタ認知する知的能力の発達が必要になるのです。そしてそれと同時に、もつれた自分の心を解きほぐそうと努力する人間的能力の発達を抜きにして、「葛藤」する幼児の姿が出現することはないのです。

加藤繁美 (かとうしげみ)

山梨大学教授。専門は保育構造論、保育実践論、保育制度論。
主な著書に『対話的保育カリキュラム(上・下)』(ひとなる書房)、『記録を書く人 書けない人』(同)、『子どもと掛けばおもしろい』(同)がある。

つまり、ダダコネする二歳児は、自分の心の中で生じているイザコザをメタ認知するだけの知性がまだ十分に育っていないのです。そして「揺れる心」の三歳児には、複雑に絡み合う自分の心を、スッキリとつなげるだけの人間的能力に、まだ課題が残っているのです。ところが、そんな姿が、四歳半を過ぎる頃になると、確実に変化してくるのです。

例えば、子どもたちは一歳半を過ぎる頃になると、自分の中に生じた要求を他者に自己主張する形で、自分を表現し始めていきます。一般に「自我の誕生」といわれるこの時期（一歳半～三歳）を起点に、子どもの自我世界は拡大していきます。そして、この自己主張する自我の世界が、まさに二歳児のダダコネの原動力となっていくのです。

ところがこの時期、こうして表出される子どもの自己主張を、親や保育者が「受けとめて、切り返す」関係を辛抱強く繰り返すことで、子どもの中には、「社会的知性」とでも呼ぶべき知的世界が、緩やかに形成されていくことになるのです。アンリ・ワロンという心理学者はこの世界を「第二の自我」と呼びましたが、こうして形成された二つの自我世界を、自分の中で一つに統一しようとする力が、まさに「葛藤する力」となっていくのです。

つまり、「葛藤する力」の育ちは乳幼児の心の育ちのバロメーターとなっていくのですが、自分の中に形成された「自我」と「第二の自我」の間を揺れながら活動する三歳児には、二つの自我世界に「折り合い」をつけながら自己決定することは、まだ結構困難な作業なのです。ところがそんな子どもたちが、四歳半を過ぎる頃になると、二つの自我世界を統一する「自己内対話」の営みに、自ら挑み始めるようになっていくのです。

そんな四歳児の姿を、一人の保育者が次のような事例と共に語ってくれました。自分で片付けていた積み木をY君に片付けられてしまったK君が、持っていた積み木で突然Y君をたたいてしまったときのことです。思わず叱ってしまった保育者の横で、クラスの子どもたちが、二人の間に生じた事件の顛末を分析し、解決策を探り出していったということです。

E「今、Kに聞いたら、K、全部片付けたかったんだって。でもさ、積み木でたたくのは良くないよ」

H「今日のキラキラさん」になりたかったのかもよ」

S「でも、たたくのは良くない、バツ！」

R「たたいたら、痛いし」

こんな感じで、子どもたちの話し合いは始まっていったのですが、次第に子どもたちの関心は、それぞれの心の中で絡み合う、感情と知性の関係に向けられるようになっていくのです。

E「K、Yに『自分で片付ける』って言ったの？」

K「言った！」

Y「言っていない！」

A「Kがたたいたのは良くないし、でも片付けちゃったYも、ちよつと悪いかもな」

T「でも、たたくのは良くないよ。ぶって、またぶって、またぶつとそれがずっと続くし」

N「おれもそう思う。Y、痛かったよな」

面白いのは、自分たちのことをあれこれ語る仲間の声に耳を傾けていたKとYの反応です。「今、どんな気持ち？」と質問した保育者に向かって、突然K君にたたかれたY君は、次のように語ったというのです。

「片付けたかった。でも、ちょっと悪かったかも……」

おそらく、常識的に考えればY君の行動に非はないのです。でも、K君の心の中を想像できなかった自分を反省して、Y君は「ちょっと悪かったかも」と語ったのです。

しかしながら、それより面白いのが、Y君をたたいてしまったK君の言葉です。

「ぶって悪かった。みんな、話を聞いてくれてありがとう」

もちろん、ここに記されている四歳児の姿は、頭かきむしるような激しい葛藤というわけではありません。しかしながらここには、他者の心の中を想像し、自分の心の中を分析し、そこに自分なりの「折り合い」をつけながら生きていく四歳児の姿が、見事に描かれているのです。そして、こうやって悩みながら「折り合い」をつける力こそが、実は「葛藤する力」の本質部分を構成し、「心の芯」となっていくのです。

幼児後期に、思考し合い、協同し合う五歳児の生活を豊かに保障するためにも、「葛藤する力」が育つ四歳児の子どもの育ちに、丁寧に寄り添いたいものです。そして、そんな「葛藤する幼児の力」を育てる四歳児保育のあるべき姿を、研究的に交流したいものです。

注 自分の心の中で起きていることを外側から見つめ、認識する力を、一般にメタ認知能力と言う。自分の心を省察し他者の心を推察する、コミュニケーション機能の基盤を構成する力となる。

視点1

子どもの葛藤、私の葛藤、保育の中の葛藤

川崎徳子

(大学教員)

三歳児のOちゃんは、担任の先生も少し気に掛けている男の子です。入園して二か月、幼稚園もずいぶんと自分の生活の場になってきているようで、他の三歳児よりもっと自由に?! 自分の行きたい場所へ好きなように動くという毎日が続いているようでした。この日も、時々保育に参加する私が三歳児の保育室の辺りにいると、ちらりと横目で見ながらも遊戯室の方へすたすたと向かっていきましました。私も何となくOちゃんについて行くと、Oちゃんは、何をするということもなく、遊んでいる年長児の横を過ぎ、遊戯室を通り抜

けて園舎の裏側の廊下を通って、ぐるりと自分の保育室の横まで戻ってきました。

その廊下の空間で、中型のソフト積み木を並べて遊び始めていた三歳児がいました。その姿が目に入った途端Oちゃんは、積み木を持っていたF君がけてまっしぐらに、体ごと向かっていきました。Oちゃんのちよつと乱暴な様子にF君もびっくりしていたので、私は慌ててOちゃんを後ろから抱きかかえて、とりあえずF君に触れないように止めました。それでもまだOちゃんはF君に向かって手を振り上げていたので、「急に行くとびっくりす

川崎徳子(かわさきとくこ)
山口大学教育学部。保育学、乳幼児心理。著書:『幼稚園で育つ』(共著、ミネルヴァ書房)、『エピソード教育臨床―生きづらさを描く質的研究』(共著、創元社)。

るよ」と声を掛けました。が、〇ちゃんは、自分でもどうしようもないようで、抱えられながらも涙目で、さらに前に前に体を動かそうとしました。そのときは私も必死でしたが、〇ちゃんが「電車、電車」と小さな声でつぶやいているのに気が付きました。びっくりしていたF君もその頃には持っていた積み木を下に置いて、じーっと〇ちゃんを見ていました。私は、もがいている〇ちゃんに「電車なんだね」と声を掛けながら、〇ちゃんの気持ち収まり体が緩むまでその場で過ごしました。気持ち収まったその後の〇ちゃんは、何事もなかったかのように、また自分のペースで好きな場所へ動いていったのですが……。

保育の中の葛藤というテーマを考え始めたとき、まず思い浮かんだのが、この〇ちゃんの姿と、そのときの私の思いでした。積み木を持つているF君に体全体で向かってしまうほどの思いがあふれる姿。そのときの〇ちゃん

からは、湧き上がる思いと、私に抱きかかえられることで無意識にこらえるけれど、涙があふれるほどの収められない何か葛藤しているような感じが、体の動きを通して伝わってきて、私の胸も痛みました。振り返ってみると、そこで感じた私の痛みは、〇ちゃんを抑えるのと、思いを受け入れ、手を緩めてしまいうようになることと、私自身の中にも二つの思いの間の葛藤があつたのだろうと思います。

このエピソードのように、保育の中には、子どもの思いに触れながら、保育者自身が自分のかかわりを考えることも含めて葛藤しなければならぬことがあります。それは時に、保育の中の「選択」という言葉に置き換えられることにもなるのかもしれませんが、子どもの葛藤を感じ、支える場での保育者の葛藤は、かかわり方を選択していくための保育の営みとして重要なことなのだろうと思います。もう一つ別の視点から葛藤の場面を考えてみます。

小さい組の頃から知っている年長児のT君に出会くと、T君から「ぜんぜん来なかつたね。僕、待ってたのに」と言ってきました。時々保育参加をする私なので、「ごめんね、なかなか来られなかつたのよ」などとやりとりした後、T君と一緒に保育室へ行きました。T君は、段ボール箱で作られた物を運んでくると、「はい、これ」と言つて、私に紙のコインを渡してくれました。箱にある穴からコインを入れると、T君は、絵が描いてある小さな紙の入ったビニール袋を箱の後ろから出しました。「本当に出てきた」と私が喜ぶと、T君はにこつと笑つて、「もう一回やつてもいいよ」と言い、また紙のコインをくれました。私と同じようにコインを入れると、また袋が出てきました。このとき、このマシーン[?]は、今の私との遊び以外には広がっていきそうにないように思えたので、ちよつと考へて、「そうだ、もつと本物らしくしよう」とT君に投げかけ、景品のビニール袋に息を吹き込んで

パンパンに膨らませて、テープで角を留め、丸い透明のカプセルのようにして渡しました。T君は、うれしそうに「わあー、いいね」と応え、「いっぱい作ろう」と言いだしました。それから、T君が小さい紙に絵を描いて、私が入れたビニール袋を膨らませるといふ作業を始めました。そこへ友達のH君も来て、一緒に作つたり遊んだりするようになりました。このマシーンがもつと他の子どもとのやりとりに広がってほしいとも思いましたが、H君とかかわっているT君を見ると、今はこれでいいのかもしれないと考へました。その後、私は別のことでその場を離れなくてはならなくなり、結局そこには戻れず、次にT君に出会つたのは、遊戯室で他の友達と一緒に何かになりきつて遊んでいるときでした。T君は私を見かけると、「もう一緒に遊べなかつたじゃん」と言いましたが、笑顔で友達とかかわっている姿があつたので、私も「ごめんごめん、また今度ね」と返し、そのまま

T君を見送り、行き過ぎたのでした。

このときの私の中にも、ほんの少し葛藤がありました。T君とのかかわりの中で同じ次元で過ごしたいと思っっている私と、保育者として、友達と一緒にしっかりと自分の時間を過ごしているT君の姿を大事に思う私と。

このように、保育の中では、それまで保育者の存在を頼りにしていたり、あるいは遊びを支える援助として必要としていたりしていた子どもが、やがて自身で動き始め、保育者が必要としなくなったとき、それを喜び、離れていくことを選択しなければならぬ保育者の心の中で起きる葛藤があります。保育の展開の場面について、津守真が「子どもにゆるる形での決断」と考察しているように、保育者が何かをやるのが絶対的な援助と思いついてしまふようになることがあります。子どもの自立と援助、指導に伴うこうした葛藤は、保育の営みと保育者の役割や援助を考え

る上で、保育者が常に向き合わなければならぬものだと思います。

改めて考えてみると、保育現場における「葛藤」は、本当にいろいろあります。二つのエピソードに限らず、保育の日々は、葛藤の連続です。その中身は、子ども自身の葛藤もあれば保育者の葛藤もあり、lightなものとheavyなもの、positiveなものとnegativeなものなど、保育の場が生活であるからこそ触れざるを得ないさまざまな葛藤です。そしてそれは、子どもも保育者も思いを出し合い生活しているからこそ湧き上がるものだと思います。満たされる柔らかい時間と、葛藤に向き合う時間と、その日々の積み重ねの中に、それぞれの人として育つ場があるのが保育の現場なのだと思つて、向き合つていきたいと思つています。

参考文献

津守真『子ども学のはじまり』フレーベル館
一九七九年 pp. 56-63

視点2

保育をめぐる葛藤について

湯浅周子

(教員)

私たちは、コミュニケーションの表出が少
ない、または表出内容が拙い子どもについて、
内的な成長も同程度なのだと思いがちでは
ないでしょうか。言葉や身振りの応答で大人
自身の働き掛けが伝わっているという感覚が

持てないと、気持ちを通じ合っているという
実感を持ちづらいことが大きく影響している
と思います。

子どもは、目線の動きや身体力の入れ方、
かすかな表現、もしくは「表現しない」とい
うことで自分の意志を表しています。本人も
まだ自覚できていないような心の動きも表れ
ることがあります。そばにいる大人が敏感に

感じ取り、表現として受けとめ、つないでい
くことで、子どもは自信を持って自分を表現
するようになっていくと信じて、私は日々子
どもたちと向き合っています。

子どもと時間を一緒に過ごしていると、「こ
れだ」という瞬間に出会うことがあります。
今まで積み重ねてきた出来事や関係性など、
さまざまなヒントが直感的につながって、子
どもの表現していることの意味を捉えられた
と感じる瞬間です。

「子どもはこう考えているらしい」というこ
とを感じられたとき、それが自分の想像を超

湯浅周子（ゆあさしゅうこ）

愛育養護学校教諭。子どもたちや実習生、保護者、保育
者と過ごす日々の中で、子どもをめぐるさまざまなこと
を考えています。私生活では、7歳、2歳の男児の母。

えていることが多くあります。そのたびに、感性を研ぎ澄まして向き合うことの大切さを思います。今回、A君の担任として過ごした二年間を振り返りながら、個人の感性に基づく直感的感覚をめぐる内なる葛藤について、自分の思うところを書きたいと思います。

A君は、小学校三年生の男の子です。一、二年生の時期に、私が担任していました。小学校に入るまでは集団生活をほとんど経験しておらず、他者とコミュニケーションをとることへの緊張がとても高いお子さんでした。好きな物語を繰り返したり、歌を歌ったりと、常に何か言葉を口にしてはいましたが、話し言葉を使ったやりとりはなかなか成立しませんでした。入学した頃は、音の出るおもちゃやキーボードの自動演奏を繰り返し操作し、音楽を聴き、歌う活動を中心に一日を過ごしていました。大人がそばにいて、繰り返しの中にある小さな変化を感じ、周囲とつなぐ日

々の中で、A君はだんだんと自分の思っていることを行動で表現するようになっていきました。A君の持っている知識と現実世界の秩序が統合されてきて、安心できる居場所を得て、自分の好きなことを通して人とつながれる自信をつけてきたのだと感じます。

そんな日々を重ねて、二年生の二学期の頃、A君は、歌や物語などの引用ではない言葉で自分の言葉として使うようになってきました。自分の気持ちを言葉にして周囲に伝えることを、自分からやってみようとしています。

三学期に入ると、ままごとをしている友達の隣に座って頬を寄せたり、友達がごっこ遊びやレールのおもちゃを広げて活動している場に入って、その真ん中に座ったりすることが何回か見られました。少し離れて様子を見ていると、A君がしばらくして場を離れたたり、何となく活動自体が収束に向かってしまったりします。友達が遊んでいる場に衝動的に入

り込んで、場を壊しているようにも見えるその行為が、実は一緒にやってみたい気持ちを表現しているのではないかということ、A君の内面的成長を考えると想像できました。A君の友達に向けた思いをどのように支え、周囲につなげていけるのか、チャンスを探しました。

ある朝、登校してきたA君は、毎朝座る小さな机ではなく、大きなテーブルセットに座り、ルーレットのおもちゃを触りながら、「さつまいも、1000円！」と表現しました。私は瞬間的に、A君がルーレットのおもちゃをレジに見立てていると感じ、「一緒に遊ぶう」と伝えてくれると感じました。この連想をもとに、「A君、お店屋さん、やってみたいの？」と聞くと、少し緊張した表情を見せます。やってみたい気持ちを持って緊張しているのだと感じました。私は、A君が「始めたい」と思っている気持ちを形にしようと、

さっとおままごとの食べ物を皿に並べ、看板を作って、お店屋さんを作りました。そして、A君に「お客さんを呼んでこようか」と言いました。ルーレットを触っている様子から、このままやってみたい気持ちを持っていると感じ、私は、ホールで音楽を楽しんでいる子どもと大人数人に声を掛けに行きました。

「A君のお店屋さんが開店しました。お買い物に来てください！」。何人かの人が集まってきた、お店の前に列ができました。先頭のBさんが品物を選び始めます。A君はルーレットを触りながら、その様子を感じています。「A君、イチゴとプロッコリーをください」とBさんが品物を選びました。A君は、ハンバーグを手にとってルーレットに乗せ、値段を決めます。「1000円！」。隣にいる私は「今日のA君のお薦めはハンバーグだそうですね」と言いました。Bさんは「まあ、ハンバーグですか。A君、ありがとう。1000円のハンバーグはおいしそうだね」と続けます。

A君は、Bさんに渡す前にハンバーグを食べるまねをして「おいしいですか？　ありがとぅございますー」とニコニコしながら言います。新しい活動が始まったドラマチックな瞬間でした。A君はハンバーグが大好きです。自分の好きな物を相手に差し出し一緒に味わう姿は、喜びにあふれていました。この後もお客さんが続き、お店屋さんは大繁盛でした。実は、これらの行為には、A君が今お店屋さんをやりたいと願っているという前提を持つていなければ関連付けて考えられないような、かすかな表現も含まれています。大人が間に入り、物を並べたり、お客さんと言葉の説明でつないでいたり、A君の注意を引き戻したりしながらの遊びが展開して行く中で、A君は自信をつけて、活動を自分のものにしていきました。家に帰ってA君は「お客さんがたくさん来ました」「楽しくなかった。緊張した」「またやりたい」と表現したそうです。その後、お店屋さんごっこは、クラスを越え

た活動の一つになっています。

A君との生活の中で、「自分の気持ちをつってもらった」という子ども自身の実感があるのだということを改めて感じます。大人が感じたかすかな表現を拾い上げていくこと、それを社会とつないでいくことで、子どもには「あなたのことをわかりたいと思ってそばにいる」というメッセージが伝わります。身体的、心理的な距離がすぐ近くにいないと感じ取れないようなかすかな表現を、直感的にくみ取り、社会とつないでいく大人として子どものそばにいるとき、子どもの行為の解釈について自分の独りよがりになってはいないかという葛藤はなくなりません。常に子どものそばにいて、無条件で子どもの味方であり続けるために、自分の行為について葛藤を抱えながらも、現実に向き合い続けることこそ大切なのだと考えています。

視点3

葛藤を思想史の中で考える

杉田孝夫

(大学教員)

コンフリクトの訳語としての葛藤

複数の要求が同時に生じて、その選択に苦しむ相克状態を葛藤ということは、ほとんど常識化している。しかし「コンフリクト」という言葉にどうして「葛藤」という訳語を与えたのだろうか。どうもピタリと符合しない。仏教では、「葛藤」は「煩惱」の意味で、葛かずらや藤のように欲や情が人の心にまとわりついて離れないさまを表している。葛藤を打ち消すという意味の「打葛藤」とか、葛藤は無用なものという意味の「閑葛藤」という表現もある。

葛藤という言葉とコンフリクトという言葉は、いつ頃、どういう経緯で結び付いたのだろうか。

鈴木大拙は「超個我に生きる」(一九四二年)というエッセーの中で、「本当に生死の意味を明らめた人」は「個我の姿で超個我を生きている人」であると述べている。この「個我」と「超個我」という言葉は、フロイトの「自我」と「超自我」を連想させる。その大拙には、『閑葛藤』(一九〇七年)という著作もある。フロイトの「コンフリクト」の訳語に「葛藤」という仏教用語が当てられた起源はこのあたりにあるのかもしれない。

杉田孝夫(すぎたたくあ) お茶の水女子大学教授。政治思想史専攻。著書:『市民社会論』(共編著、おうふう 2016年)、F. C. バイサー『啓蒙・革命・ロマン主義』(翻訳、法政大学出版局 2010年)ほか。

ドイツ観念論とフロイト

フロイトの無意識の構造論においては、本能的なものを指す「エス(イド)」と規範的なものを指す「超自我」との対立を、「自我」が理性的に統一するのだといわれる。この「エス」と「超自我」との対立を、フロイトは「コンフリクト」という言葉で表した。このコンフリクトを調停するのが「自我」の理性的な働きである。

このフロイトの論理は、カントの論理によく似ている。「エス」と「超自我」との対立は、カントの「現象的なもの(フェノメノン)」と「本体的なもの(ヌメーノン)」との対立とも言えるし、「自我」による理性的統一というのは、カントの説く「現象的」なもののうちにある「根源悪」を克服し、「本体的」な価値の実現に向かう人間の姿に重ね合わせてイメージすることができる。

近代の自我論のルーツであるフイヒテによ

れば、アイデンティティーとは「自分が自分であること」であるが、それは決して自己完結的なものではない。むしろ他者との関係の中で自己認識であり、他者認識と相互承認を前提とするものである。アイデンティティーの揺らぎは、自己に閉じこもることでは回避できない。

フロイトの理論の前提には、カントからヘーゲルに至るドイツ観念論哲学の論理があったと言えそうである。

葛藤の克服の仕方(1)

Konfliktの語源はラテン語の *con-flicere* で、そのドイツ語訳は *zusammenstoßen* である。文字通り「衝突」の意味である。この衝突という言葉で思い出されるのは、ホップズの、戦争状態としての自然状態である。

自分の自由があるということは同じように他者の自由があるということなのだから、双方の自由が成り立つような共通の条件(制約)

を設けて、その枠の中で相互の自由を享受しようというのが、近代の自由主義の考え方である。その制約を学ぶことが、社会的存在になることにほかならない。自分の自由を極大化しようとする、その制約さえ不自由の源になり、邪魔なものに思えてくる。しかしその制約を外すと自分の自由も危うくなる。主観的な自由と主観的な自由のぶつかり合いになってしまふからである。ホッブズの自然状態における、自然権としての自己保存の権利の正面衝突である。同等の力のある者がぶつかり合うことになれば、双方とも自己保存の権利の自己否定という矛盾した結果になってしまう。

このジレンマに対して自然法は、人間に、自己保存の権利を捨てて、共通の法の下で生きることを命じた。人間は、理性によって自己保存の権利を捨てよという自然法の声を聞いた。社会契約によって人間の自由と安全は共通の法の下で確保されることになる。これ

が、ホッブズの社会契約論の構図である。コンフリクトをいかにして克服し、人々の自由と安全を保障するかという方法論である。

葛藤の克服の仕方 (2)

「無意識」の世界と「意識」の世界というフロイトの二分法は、マルクスの経済的諸関係としての「下部構造」と政治的文化的宗教的な「上部構造」という二分法とそっくりである。その意味では、十八世紀までの自然法的理解の文脈と断絶している。むしろマルクスと共に、十八世紀的自然法的理解に対する十九世紀的對抗概念と見ることができ。しかし二十世紀の経験の結果は、下部構造を変えたところで政治的幸福はなかったし、無意識の世界の抑圧構造を解放したところで人の心の平安はなかったということである。

「紛争・対立」の對抗概念は、対立が極小化するという意味で「平和」である。それを媒介するのは「和解」である。紛争の回避ある

いは平和という目的を見失うことなく、妥協点を探るタフさが必要である。その条件は「他者感覚」と「信頼」である。

相互理解の欠如や利益のぶつかり合いから始まり、たいがい自己中心的であるが故に、他者に対する無理解が信頼を損ね、不信を深め、破局的な対立に陥る。自国の安全と利益を主張しつつも、無益な紛争は避けたい。しかし、自国の利益と国際的な安定と正義の枠組みは必ずしも一致しない。これが国際政治における「葛藤」の風景である。

葛藤を持って生かぬこと

煩悩や葛藤を断つて明鏡止水の境地に達することなど常人にはとてもできない。それなのに、明治から昭和にかけての日本の近代小説の主人公や作家の多くは神経症だったのではないかと思いたくなるほどこの主題にこだわっている。たいがい自閉的になり、揚げ句の果てに酒や薬に溺れたり、自殺したりする。

それらの作品にナルシステイックに読み慣れている私たちは、「葛藤」というとすぐにかの小説の主人公たちを思い出し、「葛藤」をまずはそのような文脈で理解し、葛藤のない状態を望もうとする。だが、葛藤のない状態が本当に良いのかどうなのか、甚だ疑わしい。むしろ葛藤を抱えながら、それを相対化し制御しつつうまく付き合っていたほうが人間的だし、そのような自己制御の知を身につけてこそ、人間として深みも幅も増すのではないだろうか。

最後に、鈴木大拙の「超個我に生きる」から再び引いて結びとする。

「個我は没却できないが、この個我がそれに止まって、それ以上に出られず、いつもこの個というものに縛られているときは、その個は、死であり、生ではない。」「人間にして始めて生死を生死し得る所以は、人間は、生死以上なるもの——超個我——を見て、而して生死に生死し得るからである。」



前号は、季刊誌である本誌の節目「春」号ということで、保育の絶対的な基盤である「安心」をテーマにした。今回の夏号は、そろそろ生活に慣れ自分を発揮し始める頃（保育的季節では「夏」）増え始めるだろう「葛藤」を特集した。

冒頭《View》の加藤氏は、発達心理学の見地から、「葛藤」とは子どもの自我の発達過程で四歳半頃から生じる「力」であることを明快に論じている。二歳頃の駄々をこねる子どもの姿はまだ「葛藤」しているとは言えず、四歳半頃になると、第二の社会的自我を統合しようとする力が「葛藤」となって経験されるという。「よくぞ葛藤できるようになった」というところか。保育の場では、子どもの側の葛藤と大人側のそれとが不可分にある。他児にいきなり突進しかけた瞬間、大人に後ろから抱きかかえられ腕の中で葛藤するOちゃん、そして、これでいいのかと葛藤する大人（川崎氏）。湯浅氏は、子どもの自発性と保育者としての自分の意図的働き掛けの間で、また同僚との共通理解の過程でも葛藤する。杉田氏は、倫理学、政治学の立場から「葛藤」をひもとく。どうやら、「葛藤」を人間本来の本性や未熟さに由来する悪者とする見方は古今東西共通らしい。その克服方法は、乱暴にまともると、個に埋没せず関係性や相互性を通して第三者的視点に開かれるように自己を高めることと言えそうだ。

「発達 development」という言葉の語源は、直線的な進展ではなく、こんがらがった糸玉がほぐれるイメージに由来するという。まさに、「葛藤」の状態からほぐれ、関係性を自ら制御しやすくなることが人の成長なのであろう。（H）

保育と育児

私は、四歳児、五歳児の担任として幼稚園に十二年間勤務し、現在は育児休暇を頂いて、一歳の息子の育児をしています。今までとは全く違う、息子と過ごす時間の中で、保育者としての考えを振り返ったり、親としての葛藤を感じたりするようになりました。これまでの保育で大切に思ってきたことや、育児の中で感じていることを、保育者としてだけではなく、親としての気持ちを交えながら、考えていきたいと思います。

保育者として憧れの姿

私が保育者として憧れとしているのは、学生の時に実習をさせていただいた、大学の附属幼稚園の先生方の姿です。

ある日、ホールで遊んでいた数人の五歳男児の間でトラブルが起こりました。一人の男の子が担任の先生を呼びに来て、一緒に解決することになりました。先生も一緒に積み木に座り、子どもたちと肩を並べて、子どもたちの気持ちに共感しながら解決しようとなさっていました。また、子どもたちも、先生に

依田奈津子
(幼稚園教諭)

解決してもらおうと必死に訴えるのではなく、「自分たちで何とかしよう」と、文字通り首をかしげながら、一生懸命考えていました。私は、こんなふうには、子どもたちの気持ちに共感し、「自分（たち）で何とかしようとする意欲」を育てられる保育者になりたいと思いい、保育を続けてきました。

赤ちゃんの意欲

息子はまだ一歳になったばかりですが、この一年間、赤ちゃんの「意欲」に驚かされるばかりでした。特に教えられるわけではないのに、自ら体をひねり、寝返りをする。腕を使つてずり這いを始め、腰を上げてハイハイをし、お座り、つかまり立ち、ひとり立ち、ひとり歩きと、どんどんできることが増えていきます。生まれてたった一年間で、「この意欲はどこから？」と思うほどの成長を見せて

くれました。人間は生まれながらにして「やってみよう」というものすごい「意欲」を持っていることに、改めて気付かされました。この生まれながらの「意欲」を失わず、さらに伸ばしていけるよう、実習先の幼稚園の先生のように、共感したり、見守ったりするかかわりが大切であると改めて感じました。

親としての葛藤

ところが、そのことがわかっていても、心配になったり、周りの目が気になったりして息子の行動を抑制してしまっていることがあります。特に、一歳を過ぎ、何となく友達とかかわるようになると、好奇心から友達のおもちゃを取ったり、悪気はなくても洋服を引っ張ったりしてしまうことがあり、必死にガードしている自分がいます。息子がおもちゃを取られても、「世の中うまくいかないことも

あるよ。良い経験！」と思っっているのに、息子の乱暴に見える行動に対しては、気が気ではありません。保育者としての自分とは違う姿の、親としての自分に気付かされました。

親として保育者

正直なところ、テレビのドラマやワイドショーの影響か、「ママ友は怖い」「ママ友づくりは大変」というイメージが強く、約一年前、三か月になったばかりの息子を連れて初めて地域の子育てサロンに行ったときには、とても緊張しました。

しかし、地域の子育てサロンには、子育て経験のあるスタッフがいて、優しく声を掛けてくれ、初めてのママでも溶け込みやすい雰囲気をつくってくれています。また、同じメンバーが継続して参加し、仲良くなりやすいようなプログラムも用意されていました。私はそのプログラムに参加し、息子が一歳にな

った今でも毎月集まれる「ママ友」、そして息子の初めての友達ができました。いろいろな話をするうちに、互いの子どもの性格やママの育児に対する考えも知ることができ、その友達の間では、子ども同士の間で起こる些細なトラブルも、見守ることができるようになりました。

地域によって違いはあると思いますが、子育てをする親をサポートしたり、ネットワークづくりを推進してくれたりする取り組みは、とても充実しているように感じます。その環境を生かして、親子でいろいろな場所へ出かけ、赤ちゃんのうちからたくさんの人とおれ合う機会をつくることで、親も子どもも、人とかかわり方、親と子のかかわり方を学んでいけるのだと思います。

保育者として保育者

幼稚園で子ども同士のトラブルがあったと

きには、保育者として、保護者にもそのとき
の状況や子どもたちの思いを説明し、子ども
たちにとってトラブルやその解決法を経験し
ながら学んでいくことの大切さを伝えてきた
つもりでした。しかし「わが子が生まれてか
ら幼稚園に入るまでいろいろな経験をしてき
た保護者の気持ちに寄り添っていたらどうか」
「幼稚園での姿だけを見て話をしていなかっ
ただらうか」と今になって反省しています。

けれども、逆に考えれば、幼稚園で初めて
その子どもと出会う保育者は、入園時や進級
時のフレッシュな印象が強く残っています。
そのため、そこからの成長を強く感じるこ
とができます。赤ちゃんの時期の目に見える急
速な成長ではない、子どもたちの日々の心の
成長の様子を、保育者が保護者へ、具体的に、
継続的に伝えていく大切さを改めて感じてい
ます。

これから息子が大きくなっていくにつれ
て、保育への思いや親としての思いは、また
変化していくかもしれません。「保育者として
保育すること」と「親として育児すること」
は、当然全く違うことですが、一人ひとりの
子どもを大切に思い、幸せに生きていってほ
しいと願う気持ちは同じだと思えます。その
気持ちを大切に、保育者としても親としても、
子どもと向き合っていきたいと思えます。

私の恩師が「子どもは三歳までにすべての
親孝行をしてくれる」とよくおっしゃってい
たことを思い出します。一歳のかわいい息子
と過ごす時間は、今まで感じたことのないよ
うな、何とも言えない幸せな時間です。育児
休暇を頂けたこの時間に感謝し、保育者とし
て復帰のときまで、もうしばらく、「息子から
の親孝行」をしっかり受け取り、これから先
の保育と育児の力にしていきたいと思えます。

それぞれが「楽しく」あれかし

瀧田節子

(大学教員)

わが家は娘一家と同居の三世代六人家族。三人の孫たちとの日常を思い返しながら、感じたことをお伝えしたいと思います。

こんにちはベビー

冬休みに入っすぐの日曜日の未明、孫たちのママは出産のためにチチ（孫たちは自分の父親をこう呼びます）に付き添われて入院しました。お昼にしようとしたとき、無事女兒誕生の連絡。ママとチチのいない心細さとベビーが生まれる期待にドキドキの八歳のKと六歳のNは、安堵と喜びの笑顔に包まれま

した。ママの大きなおなかをさすりながら待ちに待った赤ちゃんに会える喜びに、興奮の二人でした。

赤ちゃんは、それはそれは小さくて、瞳が大きくて、まるでかぐや姫のようにキラキラと独立した人としておりました。

お姉ちゃんたちは、恐る恐るのぞき込み、初めての出会いをしました。両腕に抱かせてもらい、いのちの重みを体を受けとめていたように思います。

「赤ちゃんは、三日分のお弁当と水筒を持って生まれてくるの。生まれたばかりは、おっ

瀧田節子（たきたせつこ）

専門：造形表現教育。東京都の図画工作専科教諭を長く務める。筑波大学附属小学校教諭、お茶の水女子大学附属小学校講師を経て、現在は東洋大学、関東学院大学、清和大学短期大学部で非常勤講師を務めている。

ばいも飲まず、『眠り姫』のように一日のほとんどもを眠っているのよ」とママから聞いて、ビックリの二人。それから、最新の医療では、新生児は誕生のときの沐浴をしないのだそうですね。私もビックリでした。

ベビー退院後十日ほどは、沐浴時に驚くほどの皮膚アカが出ました。「わあ、脱皮してみたいー」。ぐんぐん大きくなります。

そういえば、私の子育てのバイブル、平井信義先生の著書『意欲と思いやりを育てる』（中央法規出版 一九八五年）には、〈赤ちゃんの姿、三つの変化〉として、この沐浴のことについて書いてありました。改めて読み返すと、新しい気付きにつながりました。

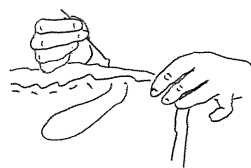


赤ちゃんへプレゼントしたい

お姉ちゃんになる二人の小学生たちは、昨年のクリスマス前から、毎日コツコツと針仕事。二年生はよだれかけ、一年生はフェルトのサイコロを、まだ見ぬ赤ちゃんへ、一針一針、拙い手で縫い、用意していました。

妹との初めての出会いに、思いを込めた作品を手にし、生まれたての妹に渡そうとしていたのは言うまでもありません。

二人は自分のお針箱を持っているので、いつでも縫い物遊びができます。フェルト地は折り紙のように材料箱にあるので、思い付くと猛然と何かを作り始めます。何枚かのフェルト布を重ねて周りをちくちくと縫うだけのものなどです。それでも、三つ編みした毛糸



を付けてポシエットに仕立てて使い、大満足したりしています。

今回感心したことは、八歳と六歳の孫たちが、自分ができることでベビ―を喜ばせたいと願い、行動したことでした。



子どものいのちの自主性

古い本をふと思い出して、羽仁説子先生の著書『知的ママは育児が苦手―娘におくるおばあちゃんの才覚』(青春出版社 一九七七年)を開きました。(家庭生活にはリズムが大切である)という章に、明治生まれの羽仁説子氏は「私は育児から教育まで、五分五分の原則というものを、大切にしてほしいと考えます。」「のびるということ、のばすということも、それを誘導するのは母親であって、いつもあとの半分は子どものもの。子どものいのち

ちの自主性にふれていなくてはダメなのです。」と述べ、(五分五分の原則が子の意志を育てる)と次の章へ続けています。

八歳と六歳の孫たちの行動に「子どものいのちの自主性」の現れを感じたことは、孫育ての醍醐味であると思いました。

三十数年前の自分の子育てのときに、明治に生きた羽仁もと子氏(羽仁説子氏の母、自由学園創立者)の教えにご著書を通して出会い、赤子の立場に立ち、思いやること、母として人として毅然と生きることを学んだことも、改めて思い出されます。

「育てる者」を導く生まれたばかりの新生児

当時、子育てをする私は「育てる者」でした。「育てられる者」であったママは、今「育てる者」となっています。鯨岡峻著『育てられる者』から「育てる者へ」(日本放送出版協会 二〇〇二年)に「育てる者」を導いてく

れるのは、むしろ生まれたばかりの新生児です。」とあるように、私たち家族「育てる者」は、新生児の生命のリズムに合わせて生活することになりました。

赤ちゃんは発見している、と見つめる

生後ひと月を過ぎたベビーAは、手や足をバタバタさせたり、「あゝ、うゝ」と声を出したりして、一番の人気者です。「あつ、見てる」「のぞいたら笑ったあ」「こんな顔してるよ」と、二人のお姉ちゃんたちも百面相をしていきやかです。

「ねえばあば、Aちゃんはおててを発見しているんだね」。一人遊びをしているAを見つめていたKが話し掛けてきました。Kはお姉ちゃんになるうと毎日緊張。他方、六歳のNは少々赤ちゃん返りをして、素直に自分を出しています。何しろNは、動物パンの鼻の部分

を食べてしまってから、「かわいそう」と二歳児のように大泣きをするような人ですから。

さて、八つと六つ
違いの三姉妹は、ど
のように付き合っ
ていくのでしょうか。
それぞれが楽しい毎
日であれかしと願う
のです。―続く―



▲2か月のAは
大福みたいになりました



▲ベビーと対面する姉二人

四季の子ども②

虫捕り

川田学
(大学教授)

「1103」

昨年の夏は、ただひたすら虫捕りをした。とりわけトンボが主役であった。年少組の息子が、開眼してしまったのである。よくあるように、二歳児のダンゴ虫に始まった。保育園に行き渡った時期があり、仕方なく、朝の三十分を付き合うことにした。園の玄関周りの壁際を、ほじほじ、ほじほじ。捕まえては私の掌たなごころに乗せ、観察する。丸まってしまえば、自分でも持てる。動きだすと、放す。そんなことを繰り返して、やがて一息つき、自分から玄関に向かった。

そうした朝のひとつが経験のため込んだか。ダンゴ虫からクモ、ハチ、チョウ、と関心が広がっていった。長い冬が終わり、年少組になると、登園渋りは不思議となくなった。ゆつくりとした春の目覚めが、子らの周りにまた虫を運んできた。そうして、三歳の夏になった。

日本には二〇三種のトンボ注がいる、ということを教えてくれたのは『日本のトンボ』という図鑑である。大変な労作であるが、専門研究者から幼児までが楽しめることが特筆に値する。何しろ写真が生き生きとしている。心から昆虫好きな人が、苦勞もいとわず、遊び心をもって作り上

川田 学(かわたまなぶ)

北海道大学准教授。専門は発達心理学。子どもの見方を柔らかにする発達研究を構築中。著書：『0123 発達と保育』（ミネルヴァ書房）ほか。

げたに違いない。だから幼い昆虫博士の美意識を捉えるわけである。果たして、安価ではないこの図鑑を、件の子は手に入れた。遠方の義父が、トンボ狂らしい孫息子に贈ったのだ。

子どもが何かに熱中するとき、しばしばきつかけがある。幼児の場合、それはある程度の期間、一つ所に没頭することで火が付く。昨夏、私はかつてないほど忙しかった。家族のもろもろの事情もあり、三歳の息子は道南（北海道の南の方面）で田舎暮らしをする私の父母のもとで二週間ほど過ごすことになった。その間、彼は祖父母とひたすら虫捕り三昧の日々を送ったのである。とはいえ、三昧とは子どもにとつてであり、二週間後に引き取った後、父からは「今度は三泊までに勘弁してくれ」と泣きのメールが届いた。

しかし、この経験は濃密だったようだ。息子はわずかな期間のうちに別人になっていた。虫捕り網を持つ構えと足運びは、狩猟採集民の子どものそれであった。保育園に戻った彼は、お盆前までヒーローだった級友の嫉妬しよとを買った。散歩先の公園で、熟練の手つきで赤トンボを素手捕りされては、並みの年少児は舌を巻く。

親の休暇は、ほぼ虫捕りに費やされることになった。九月の五連休も、毎日同じフィールドに通った。赤トンボだけでも五種類や十種類はいるのだ。ヤンマの類いは、赤トンボとはまったく異なる飛行の仕方をするということにも、いまさらながらに感心した。かの図鑑と首つ引きで学んだ。居間にはトンボの羽音が響き、部屋中を飛び回って、息子の練習の餌食になった。

同じ場所に通いつめると、むしろ変化がよく見える。北国の秋は短いが、十月まではヤンマもわずかに飛んでいた。十一月、ちらつき始めた雪が、トンボの季節の終わりを告げた。盛夏には赤や青や緑の眼で華やいだ池が、さも寂しげである。それを眺める三歳は、何を思っていたか。

セミの一生

子どもの頃、虫捕りが好きだった。ある時期、特にセミが好きで、虫かごに入りきらず、とうとう数十匹のセミを部屋に解き放った。当時は二つ下の妹と同じ部屋だったから、妹は嫌だったろうと思う。夜中、セミたちがジージー、ミンミンとやる。兄に辛抱強い妹だった。

あの頃、夏になると、昆虫採集セットというのが近所の店屋でも売っていて、母方の伯母が買ってくれた。本物の針が付いた注射器が二本、それなりに切れるメス、虫の息の根を止める薬液、防腐液、標本のピン。そんな感じのセットである。小学四年生頃だったと思う。今、あんな危ない物は売っていないかもしれない。私は、昆虫の標本を作るために、日夜、虫を捕り、注射で殺して、防腐液を入れて、ピンで虫を発泡スチロールに留めるということをやっていた。

誰だったか、そんなにセミを捕ったらかわいそうだと言った。セミは一生のほとんどを暗い土の中で暮らして、やっと地上に出たら捕まえられてしまつて、気の毒だと。幼心に、心が揺れた。でも、よく考えてみると、暗い土の中が不幸というわけでもない。地上よりは湿度や温度が一定で、外敵にも遭いにくく、結構居心地がよいように思えた。暗い所からやっと明るい所に来たから、捕ったらかわいそうというのは、にわかになんかできない気もした。

少年ながら、「かわいそう」の理屈をいろいろ考えた。セミが地上に出てくるのは、つまりは生殖のためだ。長いセミの一生の中で、ほんの最後にやって来る決死の時期なのだ。子孫を残せるか外敵に食われるかの大ばくちを打っているのが、あのセミか。そう考えると、セミのけなげさを感じた。私は何となく昆虫採集セットを使うのをやめてしまった。

M君

再びトンボに戻ろう。ある保育園に、M君という二歳児がいた。夏の終わりに伺うと、先生が頭を抱えていた。M君、もう一か月半も「不登園」だと。家は自営業をしていたが、どうも彼は日がない日、近所の店で過ごしているらしい。クーラーの利いた店内で、品物を物色している小さな背中が目に浮かんだ。

きっかけはあった。M君は時々隣接する幼稚園に遊びに行っていた。夏休み前の午前、消毒槽にプラスチックの魚をたくさん浮かべていると、幼稚園児たちがプールに来た。先生は悪気なく、幼児たちが足を洗うために、「M君、ちよつとごめんね」と、魚をどけた。そこでM君は切れてしまった。それ以来、ぱったりと保育園に来なくなったのである。

悩む先生と私で考えたのは、季節のおたより作戦であった。○歳児に妹がいたので、その連絡帳に最近の園の様子を綴る。M君に向けて。先生はこう書いた。「おにわには、あかとんぼがたくさんやってきました」。翌日、当の本人が虫捕り網を握りしめてやって来た。開口一番、「とんぼ、どこ?」。嘘のような、本当の話。

子どもにとって虫捕りにどんな意味があるか、などと考えてしまうとつまらない。でも、虫はいつも子どものそばにいて、支えてくれる。大人と子どもを、記憶と共につないでくれる。

夏は、虫と子どもの季節である。

注 尾園暁・川島逸郎・二橋亮『日本のトンボ』文一総合出版 二〇一二年



『あかちゃんのくるひ』
いわさきちひろ 絵・文
武市八十雄 案 (至光社 1970年)

『あかちゃんのくるひ』
— 親子の「危機」に寄り添う絵本 —

評者

宮下美砂子
(大学院生)

いわさきちひろ（一九一八・一九七四）の代表作の一つである『あかちゃんのくるひ』（至光社一九七〇年）は、幼い女の子が初めて「姉」になるときの揺れ動く心の様子を描いた絵本である。

一人の女性が生涯に産む子ども数の平均人数が一・四二人（二〇一四年のデータ）という現代まで『あかちゃんのくるひ』が読み継がれているのは、すでにこれが絵本の「古典」となりつつあるからかもしれない。しかし平均はあくまでも平均ではない。現在、幼稚園の年長クラスに通う私の息子の周辺では、「子どもは二人」の家庭がいまだに多数派だ。この数年間で、続々と「姉」や「兄」になるクラスメイトも出てきた。そして、二人目を授かったお母さんたちはほぼ例外なく、口をそろえて「二人目を妊娠してから子どもが不安定になった」と訴える。

そのような話を耳にするたびに、私はこの

宮下美砂子（みやしたみさこ）
千葉大学人文社会科学部 博士後期課程。専門は、戦後日本の表象文化。主にジェンダーの視点に立脚した絵本の研究を行っている。

絵本のことをいつも思い浮かべる。

絵本の内容

本作の主人公は、四〜六歳と思われる女の子である。物語は、一貫してこの女の子の目を通して語られる。まず冒頭だが、女の子の母親は家を「ずっとおるす」にしている。おそらく出産のために数日間入院しているのだろう。そして今日、留守にしていた母親と生まれたばかりの赤ちゃんが家に帰ってくる。

女の子は、初めて会う赤ちゃんに「なにかあげたいな」と考え、熊のぬいぐるみをプレゼントすることを思い付く。しかし、それは自分がずっと大事にしていた「くまちゃん」だった。大事な「くまちゃん」をあげてしまふ寂しさと、姉になる自負が相克する場面だ。「くまちゃん」に限らず、少女はこの日、自分が赤ちゃんの頃に使っていた「うばぐるま」や「べっと」を、新しく来る赤ちゃんに譲り

渡さなければならぬ。もう自分には必要のない物とわかっていても、女の子は「くまちゃん」に話し掛けながら、感傷的にそれら愛着の深い品々を眺める。その反面、成長した弟と自分が楽しく遊ぶ姿も空想し、姉になることへの喜びも感じている。

さまざまな気持ち複雑に行き交ううちに、母親が赤ちゃんを連れて帰ってくる。心の準備がまだ整っていない女の子は慌てふためき、段ボール箱の中に入って隠れてみたりする。

結局、女の子は緊張しながらそうと赤ちゃんの部屋をのぞき見る。そのかわいらしい顔を見た瞬間に、女の子は「わたしのおとう」という「姉」としての自覚を明確に持つ。

「トムの」の誕生と親子の危機

物語に登場する「くまちゃん」や「うばぐるま」「べっと」といった品々は、乳児期の自分と母親との愛情関係を象徴していると読め

る。それらを手離し、「下の子」に差し出すことは、赤ちゃんとしての自分からの決別と、母親から自分だけに注がれていた愛情の喪失を意味する。

母親の妊娠は、これまでその愛情を思う存分に独り占めしてきた子どもにとって、人生最大の危機という側面を持ち合わせている。「下の子」の誕生は、「上の子」にとって、親の愛情をはじめとし、さまざまなもの奪い合うライバルの出現でもある。そしてそのライバルは、赤ちゃんという、一人では何もできない最も弱い存在である。そんな時期にこそ、ライバルは最も手ごわい敵になる。新しい命の誕生はもちろん喜ばしいことだが、当事者の親子にとっては、それだけで済む単純な出来事ではない。

特に、「上の子」が幼い子どもの場合は、自分の現状が脅かされる危機的状況を、母親の妊娠期間からすでに敏感に感じ取っている。

しかし、それを言語化して大人に伝えるという十分な技術を持っていない。不安定な精神状態から、粗暴になったり泣き虫になったりして、親をあたふたさせてしまう。母親も、妊娠中から出産後は思うように動けないことが多く、「上の子」の要求に十分に応えられないことも多々ある。「下の子」の誕生とは、親子にとっての一大事なのである。

時代背景から読む

実は、同様のテーマを扱った絵本は、洋の東西を問わず数多く出版されている。それは、日本に限らず、「下の子」の誕生というのは、「上の子」と母親にとっての危機であると広く認識されているからだろう。そして、このテーマを扱った絵本の出版は、一九七〇年代以降に増加する傾向にある。『あかちゃんのかくるひ』は、国内の同テーマで現在購入可能な絵本としては、最も古いものの一冊である。

『あかちゃんのくるひ』が初めて発表されたのは、至光社が発行する月刊保育絵本『こどものせかい』一九六九年十月号であった。当時の日本社会は、高度成長期が収束し、安定的な成長に移行する中、第二次ベビーブーム突入前夜を迎えていた。すなわち、多くの子どもたちが、この絵本の主人公のように、これから兄・姉になろうとしていたのだ。

戦後の混乱期を脱した日本では、男性が外で働き、女性が家の仕事を担うという性別役割分担と、親子四人を中心とする核家族世帯が、家族の新しい理想像として広く共有され、実際に、都市部を中心にこうした世帯が急増した。高度成長期に絵本画家としての地位を築いたいわさきちひろの絵本にも、同時代の典型的な家族のあり方が顕著に見て取れる。『あかちゃんのくるひ』だけでなく、いわさきの自作絵本（文もいわさき自身による作品）では、そのすべてにおいて父親の存在感が非

常に希薄であり、母と子の絆の強さがテーマとされている。

このような家族モデルの広がりとは、生活に余裕が生まれたことにより、子どもは母親によつて十分に管理され、手間暇をたっぷりとかけられるべき存在となった。つまり、子どもが現在のように家庭内で最も重要と言つても過言ではない存在となったのは、長い歴史から鑑みてそれほど遠い昔のことではない。

日本においては、西洋の近代的「子ども観」が流入し、学制や児童文学が確立した明治期以降に、現代日本で共有される「子ども観」の基礎ができたといわれる。しかし、その後起きた戦争は、子どもたちの環境を大きく変えた。女性たちは「産めよ増やせよ」という戦争遂行のためのスローガンの下、子どもを三人、四人、あるいはそれ以上産んだ。一般庶民の家庭では、子だくさんでありながら食料の確保すら困難な、死と隣り合わせの毎日

を送る時代だった。そうした生活の中では、「下の子」の妊娠のたびに「上の子」に時間をかけてケアをするどころか、その程度のことを気に留める余裕などなかっただろう。

そのように考えてみると、『あかちゃんくるひ』は、極めて平和で豊かな現代の家庭像を象徴する絵本なのだと言える。

現代への問いかけ

現代日本においては、母親が産む子どもの人数は減少しているが、反対に、子どものために費やす労力は増しているように感じる。育児は母親だけの仕事だという考え方は変化しつつあるが、実態としては、いまだに母親がその役割の大部分を担わざるを得ない場合が多い。そして、子どもにとって良い教育とは何かを追求する傾向はますます高まっており、母親たちは、新しい育児の潮流に乗り遅れないようにと右往左往している。その上、

少しでも過剰に子どもに関与する母親は「教育ママ」と揶揄^やされ、手を抜けば「育児放棄」と見なされる。「正しい育児」とは何を指すのか、母親とその子どもたちは時代の流れに翻^{ほん}弄^{ろう}されるばかりである。

さらには労働人口の減少から、女性も仕事を持つことが政策レベルで要求される反面、安心して子どもを預ける体制が整わない現状は、簡単には子どもを産めない環境をつくり出している。育児に関してこんなにも多くのハードルが待ち受けている現代において、たとえ産めても子どもは一人で限界だと思う女性^性は少なくはないだろう。

本来、子どもを産む人数の選択は個人の自由である。それでも、やはり兄弟・姉妹がいたほうが子どもにとっては良い環境なのではないかという思いを払拭^{はら}しきれないのが、現代の母親たちの辛いところである。周囲の二人目、三人目がいる家庭と見比べては、プレ

ツシヤーを感じてしまう。

そんな母親たちにとっては、この絵本は少々切ない物語かもしれない。現在一人っ子のわが子を例にとると、この絵本を読んだ後、「ママ、赤ちゃん産んで」「赤ちゃんが生まれたら僕がお世話する」などと言いだし、今のところ二人目を予定していない私は返事に詰まってしまう。

しかし、それはこの絵本を作ったいわさきちひろ自身も同じだったかもしれないという点に、私は救いを感じている。いわさきは、三人姉妹の長女として生まれ、戦前のひとときは、恵まれた家庭環境の中、「上の子」が感じる葛藤や、姉妹がいる大切さを、身をもって体験してきたはずだ。そんな彼女も、生涯に授かった子どもは一人だった。戦後の混乱期の中、絵筆で夫と子どもの生活を支えた彼女にとっては、持てる子どもは一人が限界だったのかもしれない。いわさきも、現代の一

人っ子の母親が感じる葛藤を同じように抱えていたのではないだろうか。この絵本には、もし下の子がいたら、わが子にもこうした体験をさせられたかもしれないという、かなえられなかった淡い夢が託されているようにも読める。それは、多くの母親に共感される思いであると同時に、産む人数、産まない自由が尊重されない風潮や、産みたくても産めない現実という大きな問題にも目を向けさせる。『あかちゃんのくるひ』は、母親が産む子どもが何人であろうが直面する現代の親子の危機を訴えかけている。そして同時に、当事者に寄り添う働きも持っている。これからの社会においてもその存在意義を失うことなく、長く読み継がれていく絵本だろう。

レポート こども園をつくる

—文京区立お茶の水女子大学こども園の記録—

Vol.1 / 設立までの経緯、開園までの取り組み

宮里暁美



二〇一六年四月一日、お茶の水女子大学の中に、新しく、認定こども園が誕生しました。大学内にある他の附属学校園とは違い、「文京区立」のこども園です。その設立の経緯や期待される役割、課題等について、まとめることとします。

1 区と大学「子育て支援の推進に関する基本協定」を結ぶ

東京都文京区とお茶の水女子大学は、二〇〇四年十一月二十二日に「相互協力に関する協定」を結び、以来さまざまな連携事業を行ってきました。

そして、二〇一四年九月二十九日に、文京区とお茶の水女子大学との間で「子育て支援の推進に関する基本協定」が結ばれ、認定こども園を設立することを発表しました。

以下に発表会見資料の一部を紹介します。

二〇一四年九月二十九日 文京区・お茶の水女子大学合同記者会見資料より（一部抜粋）

宮里暁美（みやさとあけみ）

お茶の水女子大学附属幼稚園副園長、十文字学園女子大学教授を経て、文京区立お茶の水女子大学こども園設立後、園長に就任。

〈計画概要〉

文京区と国立大学法人お茶の水女子大学は、平成二十八年四月一日（予定）に認可保育所に幼稚園機能を備えた区立の保育所型認定こども園を大学の敷地内に開設します。

開設にあたっては、区と大学との間で子育て支援の推進に関する協定書を締結した上で、施設の建設等、必要な準備を進めていくものとします。

なお、当該認定こども園の運営については、区が大学に業務全般を委託して実施します。

〈お茶の水女子大学における教育研究活動としての取組み〉

お茶の水女子大学は、平成二十七年に創立百四十周年を迎えます。本学は、明治九年創設の日本で最も古い幼稚園を有し、わが国における幼児教育・保育に関する教育研究拠点として、研究資源を集積するとともに人材育成に尽力してまいりました。

お茶の水女子大学にとって、認定こども園

は、幼児教育・保育に関する教育研究の場です。私たちは、新たに、誕生から死までの生涯発達を見据えた〇歳児からの教育カリキュラムを開発するなど実践研究を行うとともに、望ましい教育環境を探索し、その研究成果を発信してまいります。将来的には、幼児教育と保育に関わる教職員や行政担当者、子育て支援に関心を有する方々のネットワーク拠点として、幼児教育政策の立案に貢献できることを目指しています。

〈文京区における待機児童の状況について〉

文京区では、喫緊の課題である保育所待機児童の解消を図るため、私立認可保育所の整備を中心に平成二十二年度からの五年間で一〇〇〇人を上回る保育サービス量の拡充を行ってきたところです。

しかしながら、未就学児童人口のさらなる増加や保育所申込率の上昇に伴い、新たな保

育ニーズが生じる状況となっており、平成二十六年四月現在で保育所待機児童数は一〇四人となり、特に〇歳、一歳の待機児童が急増しています。

こうした状況の中、区では、待機児童解消の緊急対策として、国立大学法人お茶の水女子大学と協働して、大学の敷地を活用することにより、保育所型認定こども園の整備を進めることとしました。

2 「こども園開設準備室」を設置し、準備を進める

二〇〇四年四月に、国立大学が国立大学法人となり、六年ごとに中期目標・中期計画を提出し、目標に向かって計画を実施し報告するようになりました。お茶の水女子大学では、二〇一三年度に第二期中期目標・中期計画の一部変更を文部科学省に認可申請し承認され、こども園の開設準備を盛り込み、二〇一五年四月からは「こども園開設準備室」を設置し、

開園に向けてさまざまな準備を行ってきました。準備室の会議は、ワーキングが週一回、室会議が月一回程度開かれ、以下のような準備をしました。

(1) こども園・保育園の視察

二〇一四年九月十一月に、準備室ワーキングのメンバーで視察を行いました。訪問先は、学校法人栄光学園認定こども園オリリーブの木（福島）、認定こども園ゆうゆうのもり幼保育園（神奈川）、新宿区立愛日こども園（東京）、関東学院六浦こども園（神奈川）、バオバブ保育園（神奈川）、岩屋保育園（京都）です。

各園では、スペースに余裕があり、短時間児、長時間児、長時間児という多様なあり方の子どもたちが共に過ごすための工夫や配慮がなされていました。「食」を大切にしている園が多く、「見える厨房」「自由な雰囲気のレストラン」に大いに刺激を受けました。玄関や門からのアプローチに心が配られており、

そこに園の文化や心もちが表れていると感じました。特に重要だと思ったのは、限られたスペースの中に保育者のスペースがしっかりと確保されていたことです。これは保育の質にかかわる重要な点である、と確信しました。

視察を通して感じたことをワーキングの中で確認し合い、自分たちの園づくりにつなげていこうと夢を広げました。

(2) こども園の施設設備に関する検討と提案

視察を重ねると同時に、ワーキングの中では園舎のイメージを出し合う時間を多く持ちました。準備室のメンバーでもある元岡展久准教授（お茶の水女子大学基幹研究院）の協力を得て、子どもたちが豊かに過ごす空間について夢を広げていきました。

接続する年齢に注目し、育ち合いを促進する。一階に〇〇三歳の保育室、二階に四歳・五歳の保育室と多目的スペース、そして厨房を作るという、斬新な案も飛び出しました。

屋上には広い材料室や研修室ができたらしい、という案もありました。視察で見た各園の姿を思い描きながら、「子どもの具体的な動きを考えよう」「『できること』と狭めてしまうのではなく『したいこと』と夢を広げることが大事」という考えのもと、プランを練りました。予算上の課題等が多くあり、計画は何度も修正され、現在の形に落ち着きました。最初に思い描いたものとはずいぶん違ってきたようにも思えますが、「子どもたちがのびのびと過ごせるように」「居心地よく過ごせるように」という思いは一貫して流れています。

(3) 保育・教育活動に関する検討と提案

こども園という新しい乳幼児期の教育施設としてどのような理念を持つかということを検討し、「つながる保育」という考えが生まれました。以下に挙げた、こども園の教育・保育の理念は、今後実際に保育を積み重ねていく中で、何度も見直され深められていくもの

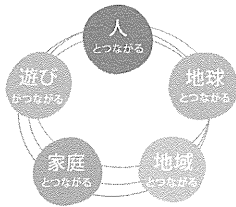
であると考えます。現時点で考えられている理念を紹介します。

【こども園の教育・保育の理念】

乳幼児時期の教育・保育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な役割を担っています。こども園では、豊かな体験や遊び、さまざまな人とのかわりを通して、子どもたちが自分らしく育っていけるよう保育の日々を紡いでいきます。発達段階や個人差に応じた援助を重ねる中で、以下のような子どもたちを育てていきます。

〈つながる保育〉

○歳から小学校入学までの時期を共に過ごす、こども園の生活。キーワードは「つながる」です。「人・遊び・地球・家庭・地域」。この五つのつなが



りを大切にして、子どもたちが豊かに育つ保育を構築していきます。

〈保育目標〉

- 食べる、眠る、遊ぶ生活を過ごし、心もからだも健康な子ども
- さまざまな人とのかわりを重ね、自分も友達も大切にする子ども
- 「やってみたい」という気持ちを持ち、じっくり遊ぶ子ども
- 自然や文化との出会いの中で、心を動かし表現する子ども

〈こども園の使命〉

- 区民への質の高い保育サービス・幼児教育の提供
- こども園の保育内容についての研究開発と発信
- 実習やインターンシップの場としての大学生の受け入れ

3 園児募集に向けての準備を進め、入園 予定者が決定する

二〇一五年十月十一日(日)、お茶の水女子大学の共通講義棟二号館一〇一室・一〇二室を会場として、こども園の説明会を行いました。当初は15時、18時の二回行う予定でしたが、予想を超えた多くの参加者が集まったため、急きよ回数を増やし、計三回行いました。

説明会の内容は、①認定こども園についての説明、②研究園であることに對する理解と協力依頼、③本園の概要(建物や園庭の状況・保育時間や預かり保育のこと等)、④今後の手順(入園申し込み等)、の四点でした。説明会に多数の参加者が集まったことから、新設されるこども園への関心と期待の高さがかげえ、責任の重大さを実感しました。

二〇一五年十一月には1号認定(幼稚園)の入園申込を受付。定員を超えたため、抽選により入園予定者を決定しました。

二〇一六年二月には2号認定・3号認定(保育園)の入園者が決定し、三月には全員の入園前の面接と健康診断を終えました。

4 こども園園舎建設及び大学キャンパス 内整備が行われる

二〇一五年十月中旬より、急ピッチで園舎建築が始まりました。また、大学本館中庭と学生会館前緑地を園庭として使用できるようにするための工事も開始されました。

大学南門横に建築中の園舎は、軽量鉄骨造二階建て、延べ床面積は534㎡です。十年間のリース契約でのプレハブ建築のため構造上の制約が多くなりましたが、床材は木の素材にし、造作家具も木調にする等工夫し、家庭的



▲工事中的様子(2階保育室全体)

な温かみのある雰囲気になるようにしました。

5 新しい園を共に創り上げる仲間が集結す

二〇一五年九月より、常勤職員の公募を開始しました。続けて非常勤職員も公募し、十二月までには、全職員の採用が決定しました。職員の内訳は、園長（大学教員兼務）、施設長、主任保育士、看護士、栄養士各一名、保育士十一名、保育補佐員九名、事務補佐員一名、用務員一名、調理員三名（委託業者）です。全職員三十名という大所帯となりました。

二〇一六年一月より三回、常勤職員の打ち合わせ会を開催、三月は非常勤職員も参加し全員で開園準備を行い、四月一日の開園へ向けて、力と気持ちを合わせていきました。

二〇一六年三月六日には、刑部育子准教授（お茶の水女子大学基幹研究院）の企画による「子どもの環境を考える」木のワークショップを通して、開園前の子ども園を会

場として開かれました。

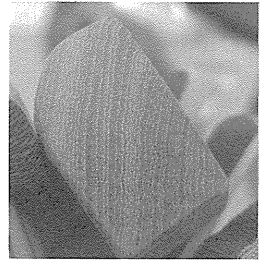
講師は、群馬県在任の建築家 福島直氏とその仲間たち（ARIGATO COMPANY 株）。「子どもたちの原風景になりたい」という願いを持ち、木・土・石・しつくい・植物などの大地の匂いにする素材を使って子どものスペースを作っているグループです。参加者は、子ども園・附属幼稚園・いずみナーサリーの保育者、大学教員、学生等約四十名。

午前中は、木を磨くワーク。「固い木ほど磨けば光る」という福島氏の言葉が参加者の背中を押しました。

ザラザラしていた木の表面は、紙やすりで時間をかけて磨くうちに次第に滑らかになっていき、そのことを実感することはいよいよ磨きにかがこもりました。



▲木を磨きながら会話が弾む



▲木目が浮き出た木片

木を磨いた時間は、まさに木と対話する時間でした。自分の手と体を動かし対話するという姿勢は、環境と

午後は、こども園で子どもたちがどのように過ごすだろうかということを考えるワークを行いました。

子どもの視点になって園内を歩き、いろいろな場所に入り込み感じ取る時間を持ち、そこで気付いたこと、感じたことを付箋に書き、それ



▲園内を歩き回る

を大きな紙に貼っていきました。それぞれに感じたことを出し合い共有しながら、環境とのかかわりの中で子どもたちに体験させたいことについて検討し、最後にグループごとに発表をしました。「のぼる」「滑る」「入り込む」「走り回る」等の動詞を出し合う、フワフワ・凸凹等の感触や窓から差し込む光に着目するなど、さまざまな視点が出され、とても興味深いものでした。

モノにかかわる・感じる・表す・多様な仲間と語り合うという体験は、「共に創るこども園」のスタートにふさわしいものでした。このワークは続きます。次回は、子どもたちが生活を始めた六月頃に行う予定です。



▲各グループの語り合いを共有

種別	保育所型認定こども園						
名称	文京区立お茶の水女子大学こども園						
所在地	東京都文京区大塚二丁目1番1号						
電話番号・FAX	03-5978-5127						
開設年月日	平成28年4月1日						
利用定員（年齢別）		0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
	1号子ども	—	—	—	11人	11人	11人
	2号子ども	—	—	—	11人	11人	11人
	3号子ども	6人	10人	11人	—	—	—
取扱う保育事業	預かり保育、延長保育						

▲園の概要（平成28年度は開設年度のため、5歳児の募集なし）

敷地面積	445㎡	
園舎	構造	軽量鉄骨造 二階建て
	延床面積	534㎡
施設設備	1階保育室	0歳児保育室、1・2歳児保育室
	2階保育室	3・4・5歳児保育室、多目的室、絵本コーナー
	調理室	調理室は0歳児保育室内に設置
	事務室	保健室を兼ねる
設備の種類	冷暖房	
園庭	こども園内園庭・大学内広場・本館中庭	

▲施設設備の概要

園長	1人 常勤（大学兼務）
施設長	1人 常勤
主任保育士	1人 常勤
保育士	11人 常勤
保育補佐員	9人 非常勤
看護師	1人 常勤
栄養士	1人 常勤
事務補佐員	1人 非常勤
用務員	1人 非常勤
調理員	3人 委託業者

◀職員体制（平成28年4月1日現在）

保育の中の「自然」、 「自然」の中の保育

白井美沙子

(保育士)

『幼児の教育』創刊(二〇一一年)の記事(現在 TeaPot にて閲覧可能なもの)から、「自然」をタイトルに含む記事(計一三五本)を読み、保育の中で「自然」がどのように語られてきたのか探ってみました。興味深い記事がたくさんありましたが、ここでは明治・大正・昭和・平成、それぞれ一本ずつ紹介します。

明治:「自然界」

五月の自然界

摩訶生

『山城の宇治の辺では、名高き茶摘が始まっ

て、人々はさぞ忙しいことであろう、忙しい中にも、能く^よ勉めて後の暫し^{しば}の間の休^まみには、どんな心持がするだろう。自然の間に働^{あそ}ぎ、自然の間に休^みむは、楽しいものである。』
 『^{ひとけまれ}人気稀なる山里の自然界の光景は、^{こと}殊に楽しいものである。』

『自然界に対して、嗜好をもつ様に、子供に心懸くるは、其^{その}一身の将来の為のみでなく、それが即ち国家の為であると思える。殊に現在の社会の情況を見ても感ぜらるることが多くある。』

〔婦人と子ども〕第一巻第五号(一九〇一年)から

白井美沙子(しらいまさこ)
 まこと保育園(石川県)保育士。本稿執筆時は、お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科人間発達科学専攻 保育・児童学コース 博士前期(修士)課程に在籍。

山里の暮らしの中にある「自然」を賛美する、著者の心情がうかがえます。

明治になって「自然」が「自然界」の意でも使われるようになったという話はよく聞きますが、「自然界」があるということは「非自然界」つまり「人間界」があるということでも、人そのものや、人のつくり出す世界の外に、「自然」を見いだしていったと考えられます。「自然」を想う心の背景には、当時なりの「現在の社会の状況」があつたようですが、著者がどんな状況を指してこの記事を書いていたのか、百年以上前の時代に思いをはせてみるのもよいかもかもしれません。

大正…「自然観察」

自然界の観察

平島権藏（東京女高師教授）

『今度幼稚園令が生まれて其の中に観察とい

う新たな項目が置かれました。其の観察というのは何んなものを、何う取り扱うのかという事に付いて多少の疑問を持たれる方がいらっしゃる。』

『植物は如何にして冬の寒さを越すかをみやるのも興味があります。要するに自然界に注意することが、興味を持つて観ることが物を分らせて呉れるのです。』

（『幼児の教育』第二十六卷第十号（一九二六年）から）

著者は生物学の教授であり、さまざま動物植物の生態を紹介しながら、それらを観察することの意義を述べています。

文中にあるように、幼稚園令（一九二六年）が出され、その項目に「観察」が導入されたことを踏まえています。保育の中でも、「自然」を観察という客観的な行為の対象とすることが、広まり始めたと言えるかもしれません。

昭和・領域「自然」、科学

「自然」領域指導の問題点

大場牧夫（桐朋学園幼稚園）

『昨今「科学性をのばす保育」が検討されたり、小学校の理科教育との関連性の問題が研究されてきたが、とくに今般の幼稚園教育要領の改訂にともない「自然」のねらいと内容について、それをどう受けとめ具体的にどのような指導をしたらよいか研究することがますます必要になってきた。』

『新しい自然領域の指導は、単なる理化学・生物学のための科学性教育ではない。むしろ広い意味の科学的思考・科学的認識への芽生えをそだてることにある。』

（『幼児の教育』第六十三巻第六号（一九六四年）から）

幼稚園教育要領（一九五六年、一九六四年改訂）

に領域「自然」が導入されたことから、その内容や取扱いについて述べた記事が多くなっています。全体として、幼児の科学性を育てようという当時の流れが見え、「自然」と科学の結び付きが強い時期であると感じます。

一方で、都市化・開発の進行により「自然」と人との距離が離れつつあることから、保育では「自然」にもっと触れさせて、情操を育みたいという保育者の思いもあつたようです。その思いからか、昭和の終わりから平成にかけて、「ふれあい」という言葉が出てきます。

平成…ふれあい、かかわり

保育の日常を問う

— 環境としての自然とどう向きあうか

新井孝昭（筑波技術短期大学）

『子どもたちに豊かに感じる心を育てるためには、自然とのかかわりは確かに大切だと思

う。しかし、それはただ与えていけばよいというのではなく、保育者が自然の中身をどの様に子どもたちに示しているのかと、常に問い直すなかでなされなければ意味がない』

『「自然」という言葉を、人の影響をまったく受けていないもの、人間の手がいっぴきでないもの、というような意味でとらえれば、日本（地球上と言ったほうがよいのかもしれない）のなかでその様な場を探すことはまったく不可能と言えるほど、現在の自然環境は人間によってその意味を（無自覚的であれ）変えられてしまっている。』

（『幼児の教育』第九十四卷第十二号（九九五年）から）

平成に入り、「環境」としての「自然」が注目され、田舎も都会も、「自然」とのかかわりが薄れているという意識が高まっています。

私自身は、この頃に北海道（道北）で生まれ育ちましたが、室内で人形遊び・ままごと

などをして過ごしていることが多かったように思います。日常生活で「自然」とのかかわりと言えるものはあまり無く、外遊びといっても、子どもたちは公園にゲーム機やカードなどの玩具を持ち込んでいたようでした。

以上で紹介したのはごく一部ではありますが、保育の中で、長きにわたって「自然」が話題に上ってきたこと、時代の移り変わりの中で、「自然」の捉え方も変わってきたことがわかりました。

最近、『幼児の教育』二〇一五年夏号でも、『自然体験』って何だ？』という特集がありました。自然体験とは何か、を考える上で、そもそも「自然」とは何か、ということも考える必要があると思います。今日至る所で、「自然」という言葉が使われますが、「自然」と離れているからこそ、安易に「自然」と言ってしまうのかもしれない。しかし、人が

認識できる一点・一側面を指して「自然」と呼んでよいものでしょうか。


私見を述べますと、「自然」とは、動植物や土・水・空気・風といった個々の事物・事象だけでなく、人間をも内包する、人が知覚・制御しきれないもの……ではないかと考えています。そして自然体験とは、「自然」の持つ（物質・時間などの）循環の中に人が生きていくことを実感すること、「自然」の大きさと人間のちっぽけさを体感することではないでしょうか。

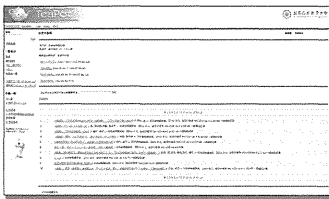
概念的になつてしまいましたが、具体的に表そうとすると、「自然」の一点・一側面しか記述できないというジレンマがあります。ただ、あえて言うならば、お庭の一本の木に登り、誇らしい気持ちになることは、木登り体験。森の中の一本の木に登り、森の広大さと己のちっぽけさを知るとは、自然体験であると思います。

保育もまた人の営みであり、「自然」の中にあるものとして捉えてみてはどうでしょう。

*旧字体は新字体に、歴史的仮名遣いは一部現代仮名遣いに改めました。また、適宜振り仮名を振っております。――編集部――

幼児の教育 バックナンバーを
WEBページで公開中

「幼児の教育 TeaPot」で
検索 



<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/52377>

明治34年発行の創刊号から、現在、平成23年発行の第110巻第4号までご覧になれます。

そこにいる子が子どもでもあるということ②

「子ども好き」という言説

浜口順子

(大学教員)

「〜するのが好き」という表現

学生が体験授業で幼稚園や保育所などを訪問し、保育を観察したり子どもと直接かかわったりした後、感想や印象を尋ねると、「〇〇ちゃんは水遊びが好きだ」とか「ままごとで動物役をやるのが好きな子が多い」などの表現をよく耳にする。その子自身が本当に好きかどうかわからない、という客観性の問題でもあるが、そのようなことを言つて、「記録には一切主観を挟み込んではいけない」などと学生が誤解しても困るので、むしろ「好き」という表現以外に言いようはないのか考えてもらうようにしている。「〜するのが好き」というのは、単にその行為をする頻度が高いとか、時間が長いという意味に過ぎないのではないか。

「〜が好きな子ども」と一くくりにしてしまうと、それ以上「その子ども」への理解や興味は深まりにくくなるだろう。なぜ「好き」な（その遊びを頻繁にする）のか、さらに言えば、なぜそれを「好き」と表現してしまいたくなるのか、そこが根本的な問いとなる。

外で遊ぶのが好きな子どもは元氣だとか、じつとしてるのが嫌いな子どもは落ち着きがない、というような判断も、およそ子ども理解というものから逸脱している。そこにいる子どもが一人の人として独自に存在していることを実感できないのだろうか。

「子どもが好き」という言説

倉橋惣三が大正十二年に、「子ども好き」「子どものため」が世に流行していると書いている（評論「子どもばかり」―『児童研究』第二十六卷八号）。しかし「流行りはつづくものではない」とも。確かに今は、保育所が近所に建設されるというと反対運動が起こる時代である。本田和子の書名を借りれば、「子どもが忌避される時代」に突入しているのかもしれない。しかし、個人レベルの話ならば、まだまだ子ども好きの人は珍しくない。大学の授業で、保育者志望の学生にその理由を聞くと、「子どもが好きだから」と素朴に答える人が多い。そんなとき、「どんなふうに好き？」「なぜ？」と問い返したくなる。逆に「大人が好き？」という問いは成り立つのだろうか。

「保育者になるなら、子ども好きの明るい人がよい」とは、世間の一般的イメージであろう。しかし実際は、「子どものことは、はっきり言って嫌いです」とか「子どもは苦手です」などと遠慮がちに告白する学生も少なからずおり、話すとき意外に面白い。子どもの表情や素直さに戸惑ったり、子どもに対するときの自分の気持ちや価値観などを細かく省察したりする人こそ、苦手意識を持つことが多いようだ。自らを「子ども好き」と称して疑われない人より信用がおけそうな気がする。

子どもを好きな人は優しく、嫌いな人は冷たいというような社会的通念も作用しているだろう。ことに女性の場合、「母性愛」という概念が付きまとい、赤ちゃんを産み育てながら、わが子をかわいく思えない、自分には母性愛が足りないのではないか、と思ひ悩んでは自分を責める人が多いと聞く。核家族が増加し、夫の育児が「育メン」などと希少価値で評価される日本のことである。地域から孤立しやすく、その「地域」さえ無実化している都市部において、母親が子どもの顔を見て「かわいい」と思う余裕もなく、育児責任に押しつぶされそうになっているのもうなずける。子ども好きを単純に美化しない感覚が、保育者として正常なバランス感覚であり、保護者支援のために重要であると思う。

子どもに「瞬間」をよこす

津守房江は著書『育てるもの目』（婦人之友社 一九八四年）において、自らの家庭における子育てや、障害のある子どもの保育を通して出会ったささやかなエピソードをすくい上げては、周辺のな事どもとの関係を織り上げながら、いつも新鮮な風のように、大人の子どもへのまなざしを爽やかに和らげ、理解を押し広げてくれる。著書の中に「足で叩く」という章があるが、いつも穏やかで優しくそんな著者にしては珍しく、子どもにも感情的な怒りを吐き出すシーンが出てくる。

一月十五日、成人の日のことである。私はこの日は朝寝をしようと楽しみにしていた。七歳を頭に四人の子どもたちは、この日も早くから起き出して騒ぎ始める。私はふとんにもぐって、頑張って寝ていたけれど、トントン、トントン頭を叩くので、仕方なしに首を出してみた。三歳のA子が、

足で私の頭を叩いている。これを見ると、自分でも驚くほどの怒りの言葉が、とびだしてきた。

「叩かないでよ、足で叩くなんてひどい……。足で小突いて起されるなんて……」

驚いたA子の顔、眠そうな父親の顔、それを見ると、私は「しまった」と思った。私だけでなく、家族にとつても楽しみな休日の朝をこわしたのではないか。私は一息いれると、「さあこれでおかあさんが怒るのはおしまい。きょうは成人の日だけど、うちでは特別に「ヒスの日」っていうのよ。疲れたおかあさんは、きょうはいつでも怒っていいの」といった。「へー、こわい日だねー」と上の子が逃げるようすをしたので、また緊張がほどけ、私もほっとした。(Dp. 2425)

それから著者は、ある光景を思い起こす。A子とその妹P子（一歳）には、さらに下に妹がおり、その赤ちゃんがベビーバスでお風呂に入ってもらっている様子を見物していた。その際、P子は自分でも入りたがるので大人が膝に抱いて守っている。しかしA子は「足がベビーバスにふれていて、足の先を動かし続けて」いた。足で叩くことは、大人から見たら「不作法なこととして否定」されることだけれど、著者はそれが、A子の強い抑制のサインであることに気付く。そうして、赤ちゃんのお風呂の後、小さいお姉さんたちA子とP子をねぎらって、ベビーバスを貸してあげることにした、というのが後日談である。

津守房江先生は去る三月十日、この世を旅立たれた（享年八十五歳）。私が子育ての忙しさのピークに達していた頃、先生への年賀状に「早朝に一人で起き出して日の出の美しさに感動し、誰にも邪魔されず本を読めるひとときが至上の喜び」と書いたら、深くそして温かく共感してくださったことが忘れられない。心よりご冥福をお祈りいたします。

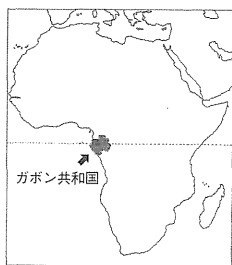
ガボンの幼児教育 JICA（青年海外協力隊）に参加して

西垣友恵
（大学院生）

私は、二〇〇九年からの二年間、幼児教育の青年海外協力隊として、ガボン共和国で活動しました。「ガボン共和国」は赤道直下、中部アフリカに位置し、熱帯雨林気候で国土の85%が森林に覆われており、多種多様の動植物が豊かに生きる国です。以前はフランスの植民地で一九六〇年に独立。そのため公用語はフランス語ですが、ガボン国内で四十以上の民族・民族語が存在するといわれています。森林・石油資源が豊富なため、アフリカ諸国の中では中進国といわれていますが、都市と地方との格差は大きいのが実態です。

首都リーブルヴィルから車で約十二時間の距離にあるチバングの教育省管轄の事務所に配属になり、ガボン人の同僚と、幼稚園の先生の先生」という立場で、①六つの公立幼稚園の巡回視察、②講習会の企画・実施（補助）、③現地教諭の技術・知識のサポート、が主な仕事でした。

ガボンでは小学校でも留年率が高く、発達



西垣友恵（にしがきともえ）
お茶の水女子大学附属幼稚園 元教諭。現在は東京藝術
大学修士課程在学。

段階に応じた適切な指導内容・方法の確立、カリキュラムの改善、現地教諭への技術的な支援が求められました。

ガボンの幼稚園

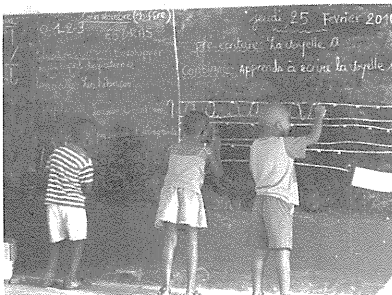
ガボンの幼稚園が始まったのは、今から約十五年前。カリキュラムは、宗主国であったフランスのシステムがそのまま入っており、年齢は日本と同じく三〜六歳（〇歳からの保育所も別の管轄で存在する）。教育課程は小学校の前段階のような授業で、日本の幼児教育のようなく、あそび・生活から学ぶ、というものではなく、読み書き、数字が重視され、丸々復唱したりする授業内容。公立は授業料が無料で、教員免許は幼稚園・小学校共通です。また、実際に私自身がつけた記録からは、次のような現状が見て取れました。

・実際の授業は、カリキュラム通りではない（特に情操教育（運動・音楽・美術）的な

ことは後回しにされるため、行われないことがある）。

・教科書、椅子・机などの物・資材が不足。
・ほぼ毎年、教職員のストライキが行われる（国が給料の支払いを遅延するため）。
・担任1人に子ども10〜40人（園による）。

幼稚園では授業中、皆、黒板を向いて座り（じっと集中なんて大変！）、小さなミニ黒板をノート代わりに、今書いている文字が何か理解できていないまま書き続けている子もいたり、実体験として伴わず、子どもたちの身に入っていない様子もしばしば見受けられました。興味関心も



▲年長組の授業

関係なく教えるというやり方……。子どもたちが少しでも生き生きとできる、取り組めることを何かできたらなと思いました。

私にできることが……。……

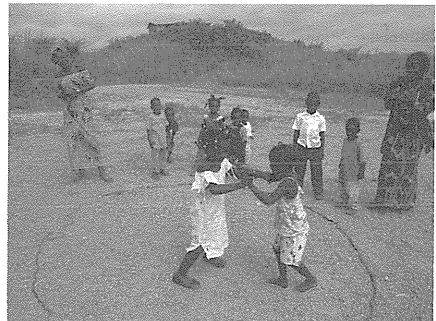
そんな中で私にできることを見つけるのはとても困難でした。当時、まだ日本でも幼稚園教諭として四年しか働いていない私が、言語も文化も教育内容も違う国で先生の先生などと厚かましい身分で活動しなければならず、現地の先生たちは、この国で自分たちがやってきたことに誇りを持っており、アンケートを取ると、先生たちは皆、「子どもたちに『成功』してほしい」「夢を実現させてほしい」という願いを持っていました。

まずは身近にある物で視覚的に学びやすくなるような教材を作ったり、簡単にできる運動遊びや製作を提案したりしてみました（段ボール製のカルタ、数の概念や実物を感じら

れるような物の利用、端切れの布でロープを作り、大縄跳びの縄や相撲の土俵にする等)。また、私の知っている技法をノートにまとめ、できることを可視化しました。

すると、それを見て、「これやってみたい」と放課後、積極的に先生たちが集まって製作勉強会をするようになり、私もガボンの手遊びや歌を教えてほしいと頼むと、喜んで教えてくれました。

また、毎月のカリキュラムのテーマに沿った内容や、日本のものを紹介する講習会を、同僚と共に企画実施しました。すると、その講習会で行ったことを少しずつ授業の中で活



▲「相撲」－端切れの布製ロープの土俵で

用してくれる先生も現れ、物がなくてもポケットマネーで材料を買って、まず自分が作ってみたい、自分の技法集を作り始める人も出てきました。

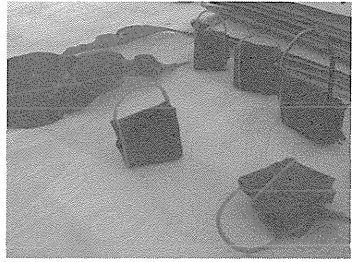
ある先生と一緒に、子どもたちが自分の名前が読めるようにと、カバン掛けと机に一人ずつの名前を貼ってみたところ、一人の子どもが読めるようになっていて、その瞬間を一緒に見て共に喜び合ったり、教師という同じ視点で先生たちとも気持ち重なる場面が一つずつ増えていくことは、私にとっても一歩前進できたような、うれしい瞬間でした。



▲やる気のある先生たちの放課後勉強会

ガボンの子どもたち

ガボンの子どもたちは、はじめ、外国人の私に対してちょっと遠くから恥ずかしそうに（警戒もしつつ？）見ている子もいましたが、休み時間に全身を使って一緒に遊び、気持ちがあぐれてくると、くるくるした目につこり笑って自然に手をつないできたり、人懐こく話してきたり、ひょうきんなそぶりを見せたりしてくれました。ダンスの動きは抜群で、中でも上手な子は周りのみんなから一目置かれる存在でした。また、ある女の子は、おばあちゃんから教わったというマンゴウの葉を使った小さなカバンの作り方を教えてくれ、みんなでたくさん作ったりしました。日本の子どもたちと同じくかわいくて素朴で、茶目つ気と愛嬌がたっぷりあります。新しい製作をしたり、思いのままに何かを作ったりするときの表情は、やっぱりいい顔をしています。



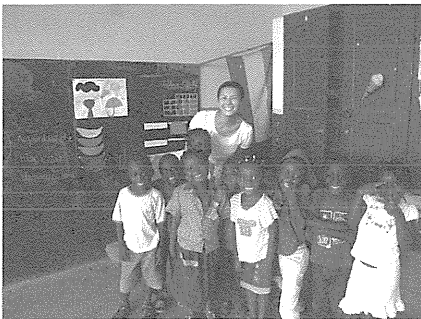
▲マンゴーの葉っぱで作った小さなカバン

たちが生き生きとやる気を持って取り組み、それに私も少しでも役に立てたなら、とてもうれしいことでした。そして「教育」の重要性と可能性を痛感しました。

それぞれがそれぞれの教育のやり方でいいのだと思いますが、帰国後も幼稚園に勤め、日本の幼児教育の良さを実感している今、やはり子どもという尊い存在とそこにかかわる保育者・教師のまなざし、環境、子ども同士によって、子どもたちの力はどこまでもぐんぐん伸びていくのだなと思います。

この国のこと、いろいろな状況、ましてや教育を変えるなんてことは容易ではありませんが、一人でも多くの子どもたち、先生

教師が子どもに願っていることはどこでも同じで、世界中の子どもたちが明るく夢と希望を持って、やりたいことをやりたいままに追求、探求していける環境とチャンスを整えるために、教師、大人たちも最大限の力を発揮し、共に与え、与えられながら、成長しなければと思います。この人生を未来の子どもたちと共に大いに笑えるように、私も少しでも何かできるように行動していきたいです。



絵本の紹介

『あかちゃんがわらうから』
おーなり由子 ブロンズ新社 2014年

「うれしいこと、ここにあるよ！」—少し前に新米ママだった作者が、素直で正直な思い（不安、そして喜び）を詩のような言葉と絵に込めた絵本。抱っこされた肩越しにこちらを向いている赤ちゃんの顔や、ぶくぶくの腕、そしてタイトルを見るだけで、気持ちが温かくなってくる。前向きになれる「光」が差し込むのを感じる。語り手は「かあさん」だが、こんな、明るい光のような存在＝赤ちゃんに励まされるのは、新米ママばかりではないだろうし、また、ママばかりに不安や悲しみを乗り越えさせてはいけない、とも同時に思う。(KT)

本の紹介

『魂との出会い 写真家と社会学者の対話』
大石芳野、鶴見和子 藤原書店 2007年

大石は、ベトナム、カンボジア、ラオス、コンボ、アフガニスタン、チェルノブイリなど、戦争や災害で心身に深い傷を負った人々、中でも女性や子どもの内面を描くような写真を撮ってきた写真家である。その大石による60点の写真と共に、大石と鶴見の対談が展開する。

鶴見が大石を詠んだ歌「ベトナムの子らの瞳凜と振したる大石芳野の瞳は凜凜と」。

年齢の違いや表現方法の違いを超えて互いに深く尊敬し合い、人間存在への深慮に満ちた者同士の語り合いは、こうも深遠かつ力強いのだな、と感じ入る。(KT)

お茶の水女子大学 ECCELL 社会人プログラム
『変革期の乳幼児教育・保育を考える』
平成28年度 後学期(10月開講) 受講生募集

現職保育者をはじめ、子どもや保育・乳幼児教育にかかわる社会人を対象に、豊かな学びを実現するための科目を集中講義で開講しています。

- ・受講生は「お茶の水女子大学 科目等履修生」として登録され、一定の条件を満たした場合に単位が認定されます(生活科学部特別設置科目)。
- ・男性も受講可能です。

【開講科目】

- 『ECCELL 子ども学ゼミⅡ』(1単位、集中講義)
(担当：浜口順子、上垣内伸子、安治陽子)
- 『ECCELL 乳幼児教育論Ⅱ』(1単位、集中講義)
(担当：安治陽子)

【出願期間】平成28年7月20日(水)～26日(火)

出願要項・入学願書をお茶の水女子大学ホームページからダウンロードしてください(大学学務課窓口に直接請求することもできます)。

【URL】<http://www.cf.ocha.ac.jp/nyuyoji>

【Eメール】nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jp

【TEL】03-5978-5949 (担当 安治)

◇皆様の声をお待ちしています◇

『幼児の教育』のより充実した誌面作り、読者の皆様の声を生かしてまいります。youji-no-kyouiku@cc.ocha.ac.jpまで、ご意見、ご感想をお寄せください。

編集後記

私は今回、特集「葛藤」の写真を選ぶ担当でした。これが本当に一苦勞。これぞ葛藤場面という写真はなかなか見つかりません。はて、葛藤とは何なのだろう？「葛や藤がもつれからむ状態」という辞書の意味に納得しつつ、葛藤の写真を探す中、私はA児の表情をふと思い浮かべていました。

大勢で楽しむ童歌遊びから「もうやめよう」と言って抜けたA児。「私も」と友達が後を追ってきてくれることを期待しているようでしたが、何事もなかったかのように遊びは続いていきました。その様子を遠くからじっと眺めるA児の表情。どうして？でも楽しそう、やっぱり戻ろうか、何て声を掛けたいの？その表情からA児の思いを想像するうちに、これまでのA児の姿がいろいろよみがえってきました。保育者との追いかっけこが大好きだった、一緒に走って少しずつ関係を築いたように思えた、

友達が入ると楽しくないと怒ったこともあった、でもみんなと一緒に楽しさもだんだん感じるようになってきた……。A児の一つの表情の中に、さまざまな思いや背景があり、それを見守る私にもさまざまな感情が湧き起こっていたように思うのです。だから、葛藤とはその瞬間だけで切り取ることでできない時間なのかもしれない、と私は感じるようになりました。そして特集の原稿を読むことによって、私のその思いはさらに確信となりました。葛藤に向き合う時間を積み重ねること、丁寧に振り返ることが、子どもにとっても、大人にとっても、心の育ちにつながる、大事な時間なのでしょう。読者の皆様は、どう感じながら読みましたか。

さて「安心」(春号)から「葛藤」(夏号)と続いてきた特集のテーマ。次の秋号は「探求」です。どうぞお楽しみに。(H)

次号予告 幼児の教育 秋号 2016年9月刊行予定

新企画、新連載が好評! 充実した内容でお届けします。

特 集 保育現場で気になるコトバ考 11
—「探求」とは…?— 加用文男氏ほか

コーナ 古典の散歩道 第11回 荻原万紀子氏

論 考 保育内容「環境」を考える 松島のり子氏 ※タイトル内容が変更になる場合もあります。

幼児の教育 夏号 第115巻 第3号

平成28年7月1日発行
編集発行人/浜口順子
編集担当/田中恭子
発行所/日本幼稚園協会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学附属幼稚園内

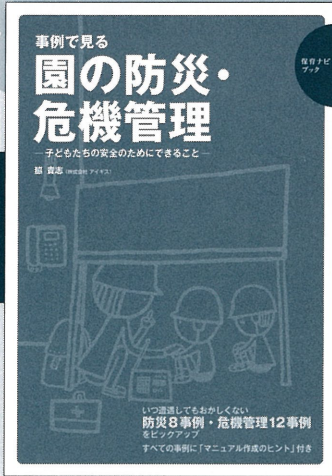
発 売 所/株式会社フレーベル館
電話:03-5395-6604(編集)
振 替/00190-2-19640
印 刷 所/図書印刷株式会社
定 価/本体834円+税
©日本幼稚園協会 2016 Printed in Japan

編 集 委 員/伊集院理子
菊地知子
佐藤寛子
灰谷知子
編 集 協 力/フレーベル館

●ご購入のお問い合わせは、フレーベル館までお願いします。03-5395-6613(営業)●

地震、大雨などの自然災害や 虐待、アレルギーへの対応など、

あなたの園のマニュアル作りを しっかりサポート！



著： 脇貴志 定価1,944円(税込)
26×18cm 80ページ
ISBN978-4-577-81388-1

保育ナビブック

事例で見る 園の防災・危機管理

—子どもたちの安全のためにできること—

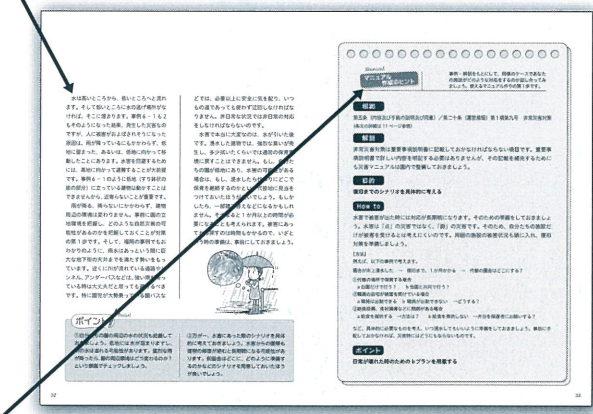
認定こども園・幼稚園・保育園 —
これからの防災・危機管理のスタンダードがわかる！

ポイント
「平成26年内閣府令第39号」（子ども・子育て支援法）に基づく〈特定教育・保育施設及び特定地域型保育事業の運営に関する基準〉に即した防災や危機管理に対する考え方に準拠しながら、これからの防災・危機管理のスタンダードを確認できます。事例→解説→マニュアル作成のヒントと読み進めることで、ケースにあわせて、あなたの園独自のマニュアル作りの道筋がわかります。

事例 防災8事例、危機管理12事例を紹介します。



解説 防災・危機管理コンサルタントの脇氏が、これまでの実務経験を元に、わかりやすく解説します。最後に読み解きのポイントがあります。



株式会社アイギス 代表取締役 脇貴志 氏
園向けに、防災・危機管理についてのコンサルティング事業を行う。日興証券株式会社、AIU保険会社、株式会社アスタリスクを経営独立。
2009年に株式会社アイギスを設立。
年間講演数、約130本。事故相談件数、約1,000件。

マニュアル作成のヒント
事例・解説をもとに、同様のケースで園がどのような対応をするべきか話し合うポイントを紹介します。自園オリジナルの使えるマニュアル作りの第1歩です。

配慮が必要な子どもが増え、クラス運営に悩む保育現場の先生たちのために。お一人に1冊、おすすめします！



「気になる子」の未来のために

要配慮児対応・園での工夫

著: 上原文 (精神保健福祉士)
 定価 2,052円 (税込)
 21×18cm 128ページ

現場で要配慮児にかかわって35年。著者の経験による解説と豊富なカラー写真で、要配慮児の特徴と具体的な対応法がわかります！

ISBN978-4-577-81403-1

イラストと写真がたくさんで
 理解しやすい!



CONTENTS (一部抜粋)

第1章 「気になる子」について理解を深めましょう

- 子どもたちのために環境や保育スタイルの見直しを
- スケジュールについての考え方
 —もう一度考え直す必要があります
- 生活のリズムを整えることは、すべての基本
 —その意味をもっと伝えていく必要があります
- 生活習慣について考える1<食事>
 —脳の中のネットワークのためにも
- 生活習慣について考える2<着脱など>
- 脳についての基本的なことを学ぶ
- 遊びについて ……

第2章 園での対応。具体的な取り組み

- 朝のおしたく ●先生の立ち位置、ピアノの位置など
- 雨の日の工夫
- 見通しをわかりやすくするための工夫
- 一人ひとりを受け容れる
- 目と手の協応動作のために —持ち物の工夫など
- 保護者への支援・・・「何を」「どう」伝えたらよいか
- 製作などの時に気をつけること ●食事について ……

第3章 先生方の実践と園のこれから

第4章 保育者のみなさんへおすすめ Books & Movies

幼児の教育 第二一五巻 第三号 平成二十八年七月一日発行

定価 本体八三四円十税